みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

The Rain and Disputes : A Case Study of the Nilotic Pari

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗本, 英世 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004378

雨　と　紛　争

——ナイル系パリ社会における首長殺しの事例研究——

栗　本　英　世*

The Rain and Disputes: A Case Study of the Nilotic Pari

Eisei KURIMOTO

In many societies of the Southern Sudan, rain-makers or rain-chiefs are prominent specialists in politico-religious life. And the disorder of rain usually results in the accusation of somebody, perhaps the rain-chief himself, who is considered to be responsible for it.

The Low-speaking Pari is no exception. From 1982 to 1985 many people were accused; some were ostracised and others killed. Since sorghum cultivation, the principal foodstuff of the Pari, depends heavily on the highly irregular rainfall, their interest in rain is acute.

Through a detailed description of disputes among the Pari, this paper demonstrates how the disorder of rain, a natural phenomenon, causes social conflict, as well as the system of ideas and behaviors that exists and operates in this context. The Pari explain the disorder of rain in the light of their own laws of causality. And it is shown that disputes resulting from the rain are very real political games as well as symbolic acts. The ruling age-grade is the decision-making body in these problems.

This has significance for many theoretical issues in Nilotic studies, such as the concept of *jok*, ritual murder of a divine king and the power relationship between a chief and an age organization.

* ジュバ大学，国立民族学博物館研究協力者

はじめに
Ⅰ．序論：政治権力の所在—首長とモジョミジ階梯
Ⅱ．自然条件としての雨とその文化的解釈
1．雨の重要性と不規則性
2．降雨の因果論
1）降雨現象の認識
2）雨をコントロールする諸力
a．ジュオク（神，精霊，「力」）
b．雨薬，雨石，雨の首長
c．チエン（死霊の復讐）
d．アジュワ（占師）
3．降雨の因果論の特性
Ⅲ．紛争の記録：1982—1985年
1．雨の首長ピデレの死と妻ニブルによる継承
2．1982年：大不作の年
1）ウィアトゥオ，ブラ両集落間の紛争
2）長老アニャラと雨の首長ニブルの逃亡
3．1983年：飢餓と紛争
1）アニャラとニブルの帰村とアニャラの再逃亡
2）飢餓と豊作
4．1984年：首長の殺害，追放
1）雨の首長ニブルの殺害
2）首長殺しに関する注釈
3）コル集落のかんばつ
4）占師ウイエン
5）コル集落首長マティアの追放
5．1985年：雨の首長不在，各集落の対応
1）ウィアトゥオ集落
2）コル集落
3）プゲリ集落
4）集落間の緊張緩和
Ⅳ．討論
1．降雨の因果論における結果の重視
2．政治的操作の媒体としての雨薬
3．告発の社会的背景
4．平等主義的分節社会における王権
5．結びにかえて

はじめに

アフリカの経済システム，とくに農耕と牧畜にとって，雨がいかに決定的な要因であるかは言うまでもない。農耕民も牧畜民も，その生活を大きく雨に依存している。この事実を念頭におけば，Mbiti の指摘するように，アフリカ全体のどの社会においても，雨をコントロールする力を持つ「降雨師」(rain-maker) は重要な人物のひとりであり，降雨祈願が重要な共同儀礼の場であることが納得できるのである［ムビティ　1970: 215］。

南部スーダン地域も例外ではない。それどころか，この地域は南アフリカと共に，降雨師たちが特別な階層を形成し，ほかの人間たちにまさる権威と権力を享受している所として知られている［ムビティ　1970: 216］。スーダンの諸民族に関する古典的な人類学的研究のなかでも，Seligman 夫妻は，降雨と降雨術 (rain-making) の問題に大きな関心を払っている［Seligman and Seligman　1932: 23–24］。Seligman 夫妻によれば，ディンカ (Dinka)，シルック (Shilluk)，アチョリ (Acoli)，バリ (Bari)，ロトゥホ (Lotuho)，モル (Moru)，マディ (Madi) 等の社会に降雨師がみられる。いずれの社会においても，その程度は異なるが，降雨師は政治・宗教上の指導者的性格を帯びている。Seligman はとくに，ディンカとシルックの降雨師を

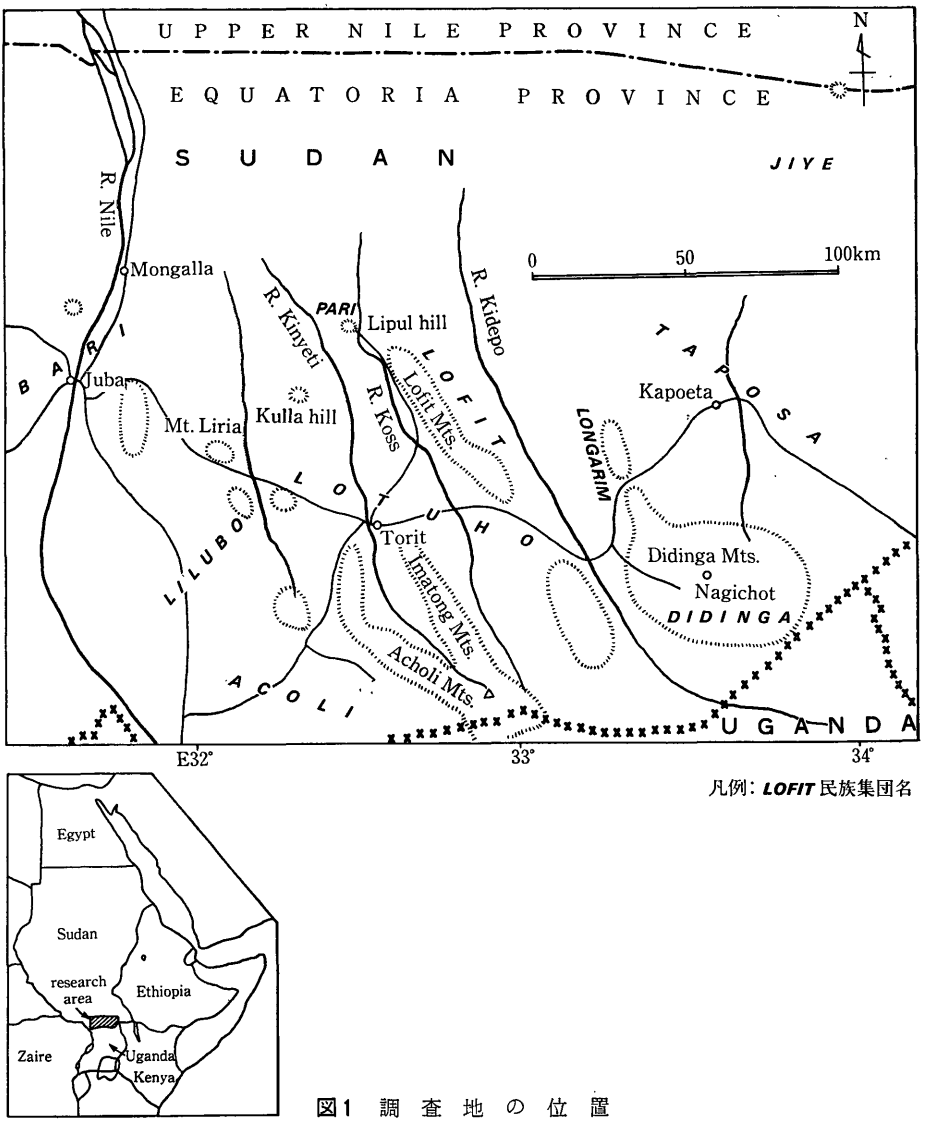


図1　調　査　地　の　位　置

典型的な，フレーザー的意味での「神聖王」(divine king)[1] と捉えている [Seligman and Seligman 1932: 23]。以上のように，南部スーダンの諸社会における政治と宗教を考える上で，降雨師はきわめて重要な存在であると思われる。しかしながら，降雨師と降雨術に関する諸問題は，Seligman 夫妻以降50年以上を経た現在でも，十分に解明されたとは言い難い。精確な民族誌的資料の蓄積が必要である[2]。

1) Seligman 夫妻のいう「フレーザー的意味での神聖王」とは，王が，祖霊の化身であること，民衆の福祉のために儀礼的に殺害されることの二点を特徴とする。

本論は，南部スーダン・エクアトリア州に居住する西ナイロート・ルオ (Lwo) 系の民族集団，パリ (Pari) (図1) における，降雨師と降雨術をめぐる社会現象の研究である。本論では，雨をコントロールする専門家に対して，降雨師ではなく「雨の首長」(rain-chief) という訳語を適用することにした。これは，こうした専門家の呪術的性格より，政治的性格を強調するためである。また，単に雨に関する専門家というのではなく，社会における政治・宗教一般に広く関与している実態を伝えるのにも，「雨の首長」のほうが適切であると考えた。

パリ社会における雨の首長と降雨術をめぐる社会現象は，しばしば政治的な紛争として顕著に現われる。なぜならば，かんばつや大雨が続くと，人々はその責任者として，雨の首長を含む具体的な人物を批難し告発するからである。パリでは，こうした紛争の結果，1982年から84年にかけて，4名の男が村から追放され，4名（男女各2名）が殺害されている。これらの紛争は，雨をコントロールする力を有する人々と，彼らから恩恵を引き出そうとする，あるいは彼らによってもたらされた災厄を除去しようとする人々との間で政治的なかけひきが表現される場であると考えられる。ウドゥク (Uduk) 族の降雨術に関する論文のなかで，James は，降雨儀礼を単なる象徴行為ではなく，社会・政治的策略がめぐらされるきわめて現実的なゲームにおいて，計算された行動を遂行するための場と解釈している [James 1972: 33]。彼女の解釈は，パリの事例を考える上でも有効である。

したがって，本論では第一に，一連のこみ入った出来事・事件の継起としての紛争を詳細に記述することに留意した。この記述を通して，ある種の政治劇の展開をたどることができる。そして，その劇中における政治的操作の媒体のひとつとして，雨薬 (rain-medicine) が用いられているのが明らかになろう。

また，雨をめぐる紛争は，かんばつや大雨の結果生じる社会的危機に対する人々の原因究明と対処の表現であるから，本論文はパリの災因論[3]の研究であるとも言える。本論では，雨にかかわる災因論を「降雨の因果論」と呼んだ。降雨の因果論の検討は，ジュオク (*jwok*)[4] やチエン (*cien*)[5] といった，ナイロート諸民族の世界観の根幹に触れる概念の考察とつながってくる。

2) Seligman 夫妻以降の成果としては，W. James による Uduk の降雨術の研究 [1972] があげられる程度である。
3) この用語は長島信弘 [1982, 1983] に拠る。長島の考え方は，Evans-Pritchard に基づいている。
4) ジュオク，あるいはジョク (*jok*) は，西ナイロートに広くみられる観念で神，精霊，力等と訳される。この観念に関する代表的な研究として，[Lienhardt 1961], [P' Bitek 1963, 1971], [Ogot 1961] 等がある。また，Evans-Pritchard によるヌエルのクオス (*kwoth*) 概念の分析 [エヴァンズ＝プリチャード 1982: chap. 1–3] も，ジュオク概念の考察に不可欠である。
5) チエンは，英語文献では ghostly vengeance と訳されている。本論第2章第2節参照。

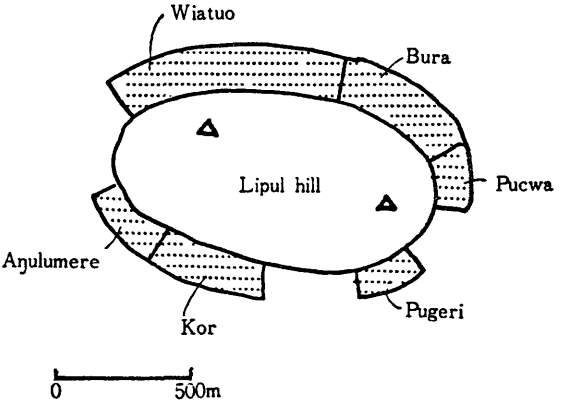
最後に，紛争の過程で雨の首長自身が殺害されるに至るのだが，この事件はパリのような平等主義的 (egalitarian) 分節社会における王権，首長権の在り方の問題について考えさせられる。そして，言うまでもなく，この問題はディンカにおける「漁槍の主」(master of the fishing spear)[6] の生き埋め，シルックにおける神聖王権と王殺し[7]という，ナイロート研究の古典的課題と直接に結びついているのである。

Ⅰ．序論：政治権力の所在　—首長とモジョミジ階梯—

パリの生業と社会構造については別稿で論じたことがある [KURIMOTO 1984; 栗本 n.d.]。ここでは，本論との関係上，首長制と年齢階梯制について概観する。

パリの人々は，リプル (Lipul) と呼ばれる独立丘の周囲に居住するが，居住空間の全体（「部族共同体」と定義する）は，六つの集落に分割されている（図2）。

各集落はひとりの首長 (*rwath*) を擁する。首長はその集落の草分けである優越リニィジ (*tung rwath, tung*=lineage) の出身である。6人の首長のなかでは，殺人事件を調停する力と雨をコントロールする力とを兼ね備えたウィアトゥオ (Wiatuo) 集落の首長と，前者の力だけを持つコル



Village	Population
Wiatuo	3,598
Bura	2,271
Kor	1,883
Pugeri	1,451
Pucwa	975
Aŋulumere	839
total	11,017

(government census, 1983)

図2　6集落の配置と人口

6) [LIENHARDT 1961: chap. 8] 参照。なお，Lienhardt が master of the fishing spear と呼んだ専門家のことを，Seligman 夫妻は rain-maker と呼んでいる [SELIGMAN and SELIGMAN 1932: 195–200]。

7) シルックの王権については，[SELIGMAN and SELIGMAN 1932: chap. 2, 3], [EVANS-PRITCHARD 1948], [LIENHARDT 1954], [ARENS 1979, 1984] 参照。ただし，Evans-Pritchard も，Lienhardt も，シルックの王が「神聖王」として殺されたという Seligman 夫妻の説には同意していない。

(Kor) 集落の首長とが重要である。ウィアトゥオの首長は，特に「雨の首長」(*rwadhi-koth, koth*=rain) と呼ばれ，6集落全体の首長とみなされている。

パリにおける首長とは何か。首長という言葉から，われわれは政治・法的権力を備えた人物を連想しがちである。しかし，パリの首長はそうした権力からはほど遠い。パリ社会で，集落や部族共同体にかかわる意志決定，および犯罪の処罰を行なうのは，首長ではなく，モジョミジ (*mojomiji*) と呼ばれる壮年の年齢階梯である。

パリの年齢体系は，年齢階梯 (age-grade) と年齢組 (age-set) が組み合わさって構成されている[8]。子供たちは6，7才に達すると，集落単位で新しい年齢組に組織される。ある年齢組におけるメンバーの年齢幅は3，4才である。いったん年齢組が組織されると，メンバーは一生同じ集団にとどまる。

6，7才の子供から7，80才の老人まで，常に20以上の年齢組が存在する。これらの年齢組は，年長から順に，長老 (*cidonge*)，モジョミジ，若者 (*awope*) という3段階の年齢階梯に分割されている。モジョミジ階梯を構成する年齢組の数は決まっており，基本的には4組であるが，5，6個の年齢組を含むこともある。

現在の年齢組の名称と年齢階梯は図3のごとくである。1977年，キラン (Kilaŋ) とタンガクオ (Thangakwo) 年齢組が長老に退き，以来アニュワ (Anywa) 以下四つの年齢組がモジョミジ階梯を構成している。

モジョミジを構成する年齢組の

年齢組		年齢階梯
	79,80 years	
Ukwer		
Lilalo		
Kwara		
Bondipala		Cidonge (長老)
Ithiyio		
Yuuru		
Kilaŋ		
Thangakwo		
	52.3 years	
Anywa		
Akeo		Mojomiji (モジョミジ)
Maridi		
Adeo		
	38,9 years	
Madan		
Morumaafi		
Bolish		
Lidit		Awope (若者)
Dringa		
Teteu		
Ithatio		
Abou		
Ithilero		
Ithicungo		
	3.4 years	

図3　年齢組と年齢階梯 (1985年)

8) パリの人々は，この社会組織を隣接するロトゥホ（東ナイロートに属する一民族集団）から借用したものと認識している。事実，モジョミジは，ロトゥホ語の，モニョミジ (*monyomiji*= fathers of the village) に由来すると考えられる。また，歴史的・言語的にパリともっともつながりの深いアニュアク (Anywak) では，年齢組織は未発達である [Evans-Pritchard 1940:42]。

なかで，年長の二つは特に「頭」(*wic*=head) と呼ばれ，村の統治に責任のある人々である。現在の頭はアニュワとアケオ (Akeo) 年齢組であり，それ以前はキランとタンガクオ年齢組が頭であった。今から数年後には，現在のモジョミジ全部が引退し，マダン (Madan) とモルマーフィ (Morumaafi) 年齢組を頭とする四つの年齢組が，若者階梯からモジョミジに昇格する。

モジョミジは強力な統治団体である。公的な意志決定は，全員が参加できる合議制の下で行なわれる。こうした会議の場で，議論をリードしまとめあげるのが，各年齢組のリーダーたちである。リーダーにはリロー (*liloo*) というタイトルが冠せられ，弁舌に秀いで，才智に富み，胆力があり，かつ思慮深い人でなければならない。

モジョミジ階梯がいったん決定したことは大きな強制力を持っている。例えば，犯罪に対する罰として，モロコシや家畜（山羊，羊，牛）の没収が決定されれば，被告がその行使を拒否するのは不可能である。また，モジョミジは，ある人に暴力による制裁を加えたり，ときには村から永久追放したりすることもできる。そして，スーダン南部では国家による統治機構が弱体なせいもあって，地方政府もモジョミジの決定にはほとんど干渉できないのである。

モジョミジ自身は，自分たちの役割をどう捉えているのだろうか。彼らにモジョミジの仕事とは何かを尋ねると，「昔は部族間戦争を組織し遂行することであったが[9]，今は食料を確保することである」という答えが返ってくる。モロコシ生産が雨に大きく依存してるがゆえに，「食料確保」の問題は雨をめぐる葛藤と密接に関連していることは次章で述べる。ともあれ，政治的，法的役割より，食料の問題にウエイトが置かれているのは興味深い。

それでは，パリ社会における首長は，いったいいかなる役割を担っているのだろうか。モジョミジが開く会議には，首長の出席が不可欠であるといわれる。そこで首長は，衆議の一致を待って会議をしめくくる役割を果す。しかし，議論の途中では，首長はほとんど積極的に発言しない。議論を導くのは，年齢組のリーダーたちである。つまり，首長の役割は，いわば「最後のひとこと」を発することにある。

しかし，パリの人々にとって，首長は単なる会議のしめくくり役以上の存在であることも確かである。彼らは次のような表現を用いて，首長とは何かを説明する。いわく，「村 (*paajo*) が存在するのは首長のおかげである」，「村と呼ばれるそのものこそ首長である」，「首長は，彼に拠って議論できるように，ジュオク（神，精霊）が与えたもうたものである」等々。

9) 部族間戦争は，植民地政府（アングロ＝エジプト政府）によるこの地域の支配が確立する1920年代まで盛んであった。

序論では，パリ社会における政治的・法的権力はモジョミジ階梯に集中していることを指摘した。また，首長に関しては，上の言明から，パリの社会生活の根源とかかわる存在であることがうかがい知れる。

もちろん，以上の記述だけでは，首長制と年齢階梯制について十分な説明がなされたとはいえない。以下の本論における紛争の記述と分析を通じて，モジョミジ階梯と首長の役割，両者間の葛藤が明らかになることにより，この不十分は補われると考える。そして，それはパリ社会における政治構造の本質を垣間見せるはずである。

Ⅱ．自然条件としての雨とその文化的解釈

1. 雨の重要性と不規則性

拙論で論じたように[KURIMOTO 1984, 1986]，パリは農耕，牧畜，狩猟，漁撈，採集からなる多元的生業を営んでいる。そのなかでも，モロコシ栽培を根幹とする農耕は，食料供給源として最も重要であり，多くのエネルギーと時間が農作業に投入される。農耕が主として女性の仕事であるアフリカでは例外的なことに，パリ社会では農耕の労働の大部分は男性によって担われている。パリの男たち自身，自らを牧民あるいは狩人ではなく，「耕作者」(*lipuri*, pl. *lipuiye*)[10]として認識し，それを誇りにしている。

モロコシは，主食であるカタガユ (*Kwan*) の材料である。また，社会生活には不可欠なモロコシビール (Koŋo) の原料としても大量に消費される。パリの農地は肥沃であり，ひとりの男が耕作する平均 1〜2 ha の畑からは，ふつう1年の消費をまかなうに十分な収穫が得られる。しかし，年による収量の変動は激しく，次の収穫までにモロコシを食べつくしてしまうこともしばしばある。したがって，常に飢えの危険にさらされている彼らにとって，十分なモロコシが穫れるかどうかは，毎年きわめて切実な問題といえる。先に述べたように，統治団体としてのモジョミジ階梯の第一の仕事は，食料 (*Kwan*＝モロコシのカタガユ) を確保することにある。また，"let the food come" (*kwan uee*) というのは，人々がジュオク (*jwok*) に対して行なう共同祈願 (*lam*) で最もよく用いられる文句のひとつである。

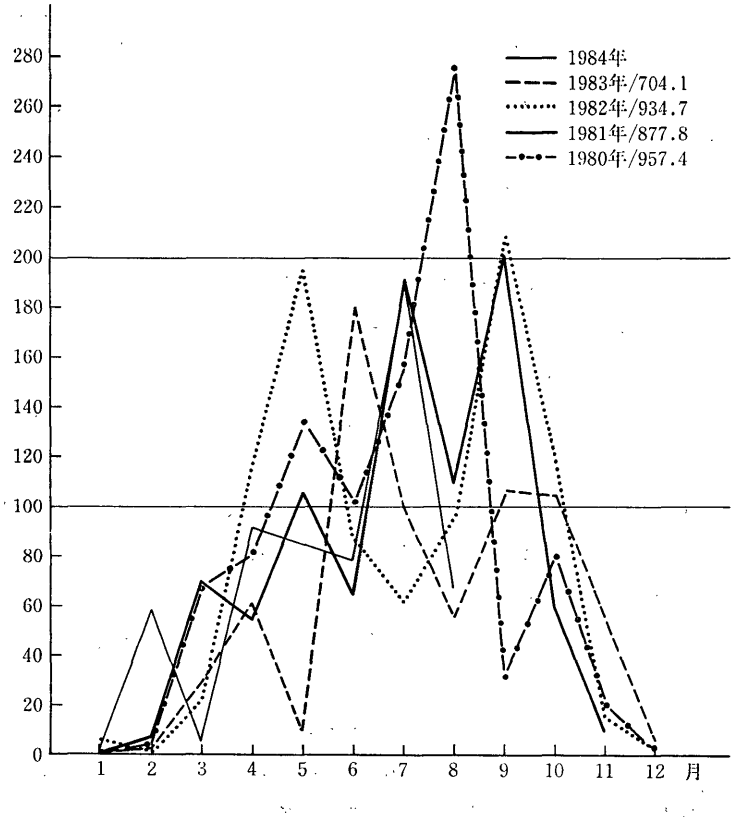
パリの人々が，十分なモロコシの供給があることを常に祈っているにしても，実際には食料不足に悩まされることも多い。モロコシの生産量を限定している要因には

10) *li-* は人を表わす接頭辞，*-puri* は「耕作する」という意味の動詞 *puro* の転訛である。

表1　1979年～1984年8月の月別降水量（単位ミリメートル）

月	1979	1980	1981	1982	1983	1984
1	—	—	—	7.5	—	1.6
2	78.0	5.5	6.9	0.6	1.0	58.5
3	35.0	71.3	70.0	21.8	28.6	4.7
4	18.0	79.7	55.9	116.1	61.1	91.3
5	102.0	133.5	106.7	196.8	10.0	35.6
6	121.7	102.1	64.2	86.2	180.7	78.8
7	80.6	156.5	192.4	61.1	100.0	187.0
8	76.9	275.3	110.3	96.1	54.9	68.0
9	125.3	31.9	201.1	211.1	105.8	
10	15.5	80.5	59.9	119.7	104.6	
11	25.0	20.6	10.4	16.1	53.2	
12	6.8	0.5	?	1.6	4.2	
total	684.8	957.4	877.8+α	934.7	704.1	

ラフォン R.D.C. での計測データによる。1981年12月・1984年9月以降はデータ欠落



どのようなものがあるだろうか。時には，鳥，とくに大群で飛来するハタオリドリ(weavers) の仲間が，モロコシに致命的な損害を与えることもある。しかし，投入される労働量と生産技術を一定と考えると，雨が最も決定的な要因であるといえる。

かんばつだけがモロコシに害を与えるわけではない。雨は多すぎても，畑を冠水させることにより，収量を損なう。また，開花期に大雨が降ると受粉が妨げられて，結実しないこともある。つまり，モロコシの育成には，出芽から出穂・開花の時期までに適度の降雨が必要である。

降雨に対するパリの関心の高さは，次の事例によく現れている。例えば，“let the rain come” (*koth uee*) という文句も，先の “let the food come” とともに共同祈願において多用される。また，モロコシの成育期に，町に居住するパリが村から出てきた人に会うと，あいさつの一部として「雨は降っているか」と聞くのがふつうである。雨はパリにとって身近で切実な問題なのである。

ところで，この地域では，パリの願いに反して降雨は不足したり，過剰であったりすることがひんぱんに生じる。降雨のパターンと量はきわめて不規則である。それは，二つの意味において不規則といえる。まず第一に，年による降雨の変異はきわめて大きい。これは，表1のデータから明らかである。このデータは，村から約 9 km 離れた所にある，ラフォン地域発展センター (Lafon R.D.C.) で計測された。この場所は，プゲリ集落の畑がある地域に含まれる。表1によると，例えば，モロコシの播種・出芽期にあたる4月では，1979年にはわずか 18.0 mm であるのに，1982年には 116.1 mm もの降雨があった。播種のあとに降雨が不足すると，モロコシは出芽しないので，2回，3回と播種を繰り返すことを余儀なくされる。また，結実期にあたる8月をみると，1983年は 54.9 mm であったのが，1980年にはその約5倍の雨が降った。以上のような年ごとの大きな変異は，天水に依存するモロコシ生産を不安定にする主要な原因のひとつである。

第二に，降雨の量とパターンは，場所による変異が大きいという点で不規則である。つまり，この地域では，同じ日にある場所の畑には激しい雨が降ったのに，数キロメートル離れた場所では通り雨ですんだというようなことが，しばしば起こる。この，第二の不規則性については，測定データはない。しかし，日常的経験に照らして妥当だといえる。

図4に示したように，モロコシ畑は，村を中心とした半径10キロメートルほどの範囲内にひろがっている。そして，集落が丘を中心として扇形に分割されているのと同様に，畑地も集落毎に分割されている。つまり，ある集落のメンバーは，その集落の

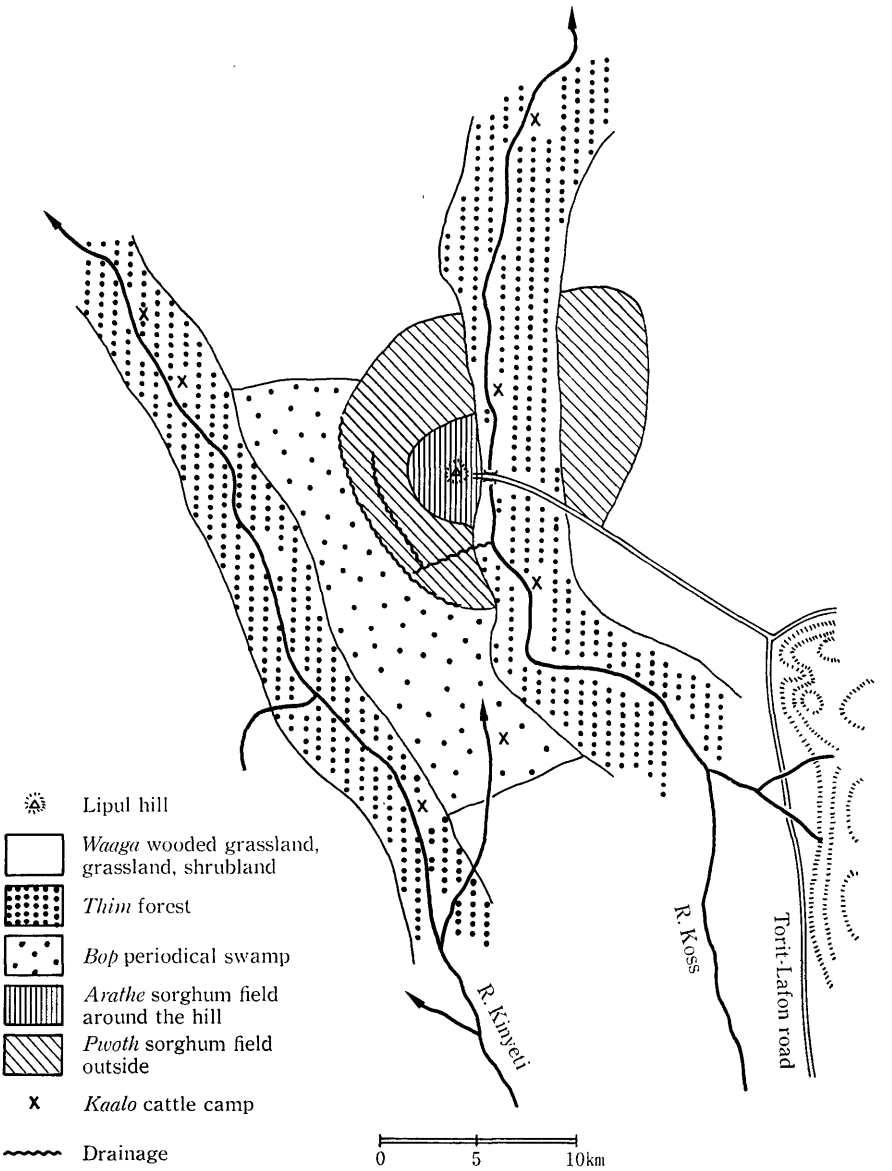


図4　自　然　環　境　の　民　俗　分　類

前面に畑をもつ傾向がある。したがって，例えば6月頃に，ある集落の畑ではモロコシが人の背たけほどに成長しているのに，別の集落の畑にいくと，雨不足のためにまだ30～40 cm にすぎないといったことがありうるのである。

以上のように，降雨は年よって，また場所によってきわめて不規則であり，そのた

めモロコシ生産は不安定なものにならざるをえない。

パリ社会では，モロコシ生産の不安定性が様々な社会的葛藤を生み出している。そして，降雨の不規則性は，生産の不安定性の主要な原因である。しかし，以上のことからただちに，降雨の不規則性が社会的葛藤を創出していると言えるわけではない。その前にまず，パリの人々自身が降雨の不規則性をどのように因果論的に認識しているかが検討されねばならない。なぜなら，もし彼らがかんばつや大雨を，天あるいは超越的存在のなせるわざとして，人間の力の及ぶ範囲外のこととして運命論的に耐えしのぶ人たちなら，降雨の不規則性が直接的に社会的葛藤を創出しているとはいえないからである。

2. 降雨の因果論

1) 降雨現象の認識

近代気象学の洗礼をうけたわれわれは，雨がなぜ，いかにして降るのかを，「科学的」知識に基づいて理解できる。ときたま人々を苦しめる豪雨，台風，あるいはかんばつも，気象学的な現象として把握しているのである。

ところで，パリの人々自身は，降雨，特にその不規則性にどのような因果論的説明を与えているのだろうか。先にみた，パリの居住地域における降雨の不規則性は，近代気象学の知識をもってしても，十分に納得のいく説明が与えられないのではと思えるほどである。

なぜ，去年はモロコシに害を与えるほどの大雨が降ったのに，今年はかんばつでモロコシは立ち枯れてしまったのか。なぜ，自分たちの畑では雨不足のためにモロコシはようやく膝の高さに達したぐらいなのに，数キロメートル離れた彼らの畑は雨に恵まれ，もう穂が出るほどに順調に育っているのだろうか。こうした現象を彼らはどう認識し説明しているのか。

結論を先取りすれば，パリは彼らにとって切実な結果をもたらす降雨の不規則性を，固有の因果論に依拠して説明しようとする。以下で述べるように，この因果論は決して一元的なものでも論理的に一貫したものでもない。また，常に納得のいく説明を与えられるわけでもない。しかし，この因果論を用いて降雨の不規則性を理解可能にする作業を，パリが不断に続けているのは確かである。こうした作業のプロセスは次章で詳述するが，その前にここでは，降雨に影響を与える諸作用因を説明する。

パリの観念のなかでは，雨を降らす（あるいは止める）力を有する物と人とが存在する。私の調査経験によれば，こうした力を備えた存在は，次の四つのカテゴリーに

整理できる。すなわち，ジュオク，雨薬と雨の首長，チエン，アジュワである。

2)　雨をコントロールする諸力

a.　ジュオク（神，精霊，「力」）

ジュオク（*jwok*, pl. *juu*）は，降雨を生じさせる最も基本的な存在である。パリの人々は，「雨は，人間ではなく，ジュオクによってひきおこされる」としばしば言明する。それではジュオクとは何か。じつは，この概念を英語，あるいは日本語に翻訳することはたいへんやっかいな問題である。ジュオク，もしくはジョク（*jok*）の概念は，パリだけでなく広く西ナイロートのあいだに分布しており，場合によって神（God），精霊（god or spirit），悪霊（devil），「力」（power）[11]等の訳語があてられている。そして，「ジュオク（ジョク）とは何か」という問いは，ナイロート研究において長年にわたる最も論争的な問題のひとつであった。パリにおけるジュオクの概念の詳細な検討は別稿に譲るとして，ここでは本論との関係上，その概要を述べるにとどめておきたい。

日常会話，儀礼言語におけるジュオクの用法，およびパリとの議論から私が理解するところによれば，この概念は以下の4つの意味範疇に分析的に区分できる。これは分析上の区別であって，パリ自身がこうした区別を意識的に用いているわけではない。

①　神，造物主
②　精　霊
③　「力」
④　疫　病

①の意味でのジュオクは遍在しており，また人間界からは離れすぎていて，それに直接干渉してくることはない。②の精霊は，かならず洞窟，巨岩，巨木，泉，川の淵といった特定の場所と結びついており，人間を「捕える」（*mako*）ことにより災厄をもたらす。人間は，祈願と供犠を通じて，精霊に災厄をとり除くよう働きかけることができる。③の「力」は，パリの理解を越えた不可思議な力能を意味する。例えば，彼らが，「白人はジュオクである」と言うとき，「白人は神である」あるいは「白人は精霊である」ことを意味しているのではない。白人の持っている，パリにとっては不可思議な力能に言及しているのである。最後に，天然痘等の恐ろしい疫病そのものもジュオクと呼ばれる。

以上，四つのカテゴリーのなかで，降雨とかかわるのは①の神である。つまり，「雨

11)「力」（power）の訳語は Lienhardt に拠る［Lienhardt　1961: 28］。

は人間ではなく，ジュオクによってひきおこされる」という言明は，降雨という現象が人智によるコントロールの範囲を越えた問題であることを意味しているのである。人間ができる唯一のことは，集合的祈願によって，十分な雨が降るようにジュオクに対して祈る，あるいは乞うことである[12]。

このように，「雨をもたらすのはジュオクである」という認識は，降雨の因果論において最も基本的な前提であると考えられる。それゆえに，①の意味でのジュオク，神は，降雨の因果論における究極因であるといえる。

しかしながら，ジュオクに降雨の究極因を求める一方で，パリの人々は雨をコントロールしうる力をもつ人物，および物が存在することを信じている。そのなかで，まず「雨薬」と「雨の首長」をとりあげる。

b. 雨薬，雨石，雨の首長

最大の集落であるウィアトゥオの首長が雨の首長 (*rwadhi-koth*) と呼ばれることは序論で述べた。その地位は父系的に継承され，彼は雨をコントロールする力を持つと信じられている。

それでは，雨の首長の力の源泉は，いったいどこにあるのだろうか。この問いに対しては，二通りの解答が可能である。ひとつは，首長としての力能，テーゴ (*teego*) であり，もうひとつは，雨薬と雨石である。

テーゴは，たんなる物理的・身体的力とは異なる，首長だけが備えた力を意味する。テーゴはジュオクが備えた力を意味する。テーゴはジュオクが授与したとみなされている。この力のおかげで雨の首長は雨をコントロールできるのである。それと同時に，彼は雨薬 (*yadhi-koth*, pl. *yendi-koth*) と雨石 (*gwyo*, pl. *gwii*) を所有し，その用い方を知っているため雨をコントロールできるとも考えられている。つまり，雨の首長は，身体に内在するテーゴと，外在するいわば道具といえる雨薬と雨石の両者の助けをかりて，自らの権威を保持しているのである。

ところで，雨薬と雨石は，いったいいかなる材質・形状のもので，いかに用いられるのだろうか。雨薬の原語 *yadhi-koth* は *yath* of rain の意味である。*yath* は木一般および薬を意味する。パリが用いる民間薬のほとんどが植物（特に根）を材料とすることを考えれば，木と薬に同じ単語があてられているのは納得できる。そして，雨薬はある種の木片であるらしい。雨石は，じっさいある種の石である。指先大の一対の小石から成り，おそらく水晶のような結晶であるらしいが未確認である。

雨薬と雨石は，雨の首長自身が保管し，彼がそれらを用いる時は，ひとりで人目に

12) パリ語では，ジュオクに祈る場合と，他人に物を乞う場合が，同じ動詞 *kwaco* で表現される。

ふれることなく行なうのでパリのほとんどの人々も目にすることはない。残念ながら私自身も雨薬と雨石を一度も見たことがなく，その材質・形状・用法については，伝聞の情報に頼るしかない。

また，後に述べるように，雨をめぐる紛争が表面化するときには，ほとんど必ずといってもいいほど，雨薬と雨石の存在の有無，その所在が問題の焦点となる。つまり，これは常に微妙な政治問題であって，それ故に，雨薬と雨石に関する正確な情報を得るのは一層難しいのである。

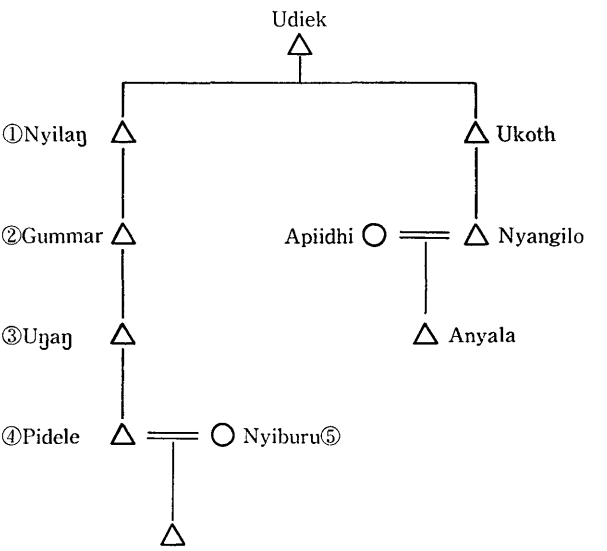


図5　雨の首長の系譜
（アラビア数字は雨の首長の代数を表わす）

しかし，1983年1月に初代雨の首長ニラン (Nyilaŋ)[13] の孫にあたるウィアトゥオ集落の長老アボラ (Abola) が語ってくれたところによると，雨の首長ピデレは存命中，2種類の雨石と7種類の雨薬を所持していた。これらは，ニランからピデレに至る4代の首長の間に蓄積されたものである（図5）。雨石はブラ集落とコル集落から，雨薬のひとつはブゲリ集落，他はアチョリ (Acoli)[14] から獲得した。このように雨の首長は，他集落およびアチョリから雨石と雨薬を得て，その権威を増大させていったと考えられる。アボラの話によれば，ピデレは様々な雨薬を常に身につけて持ち歩いていたという。*yamo*（風を意味する）と呼ばれた雨薬は，特に雨を止めるために用いられた。これを，火の傍に置くと雨を止めることができた。また，雨石は第一夫人の家で壺に入れて保管されていた。雨を降らせるときには壺に水を注ぎ，雨を止めるときには壺から取り出したという。

ここで，雨の首長についてひとつ補足しておく。雨の首長は，降雨に関して雨薬と

13）ニランの父は首長ではあったが，雨の首長ではなかった。ニランは，雨の首長の制度を，隣接するロトゥホのサブ・グループ，ロフィット (Lofit) から取り入れたといわれている。つまり，雨の首長制は，年齢組織と同様に，ロトゥホとの文化接触の結果借用されたと考えられる。
14）アチョリは，パリと同じく西ナイル語ルオ方言を話す民族集団。

雨石の他に，ウベル (*ubel*) という父祖伝来の槍を保持している。初代雨の首長ニラン以前には，パリの首長は共同祈願の場にこの槍を持ち出し，人々はそれを通じてジュオクに降雨を祈願したという。雨の首長が誕生する以前は，おそらくこれが最も中心的な降雨コントロールの試みであったと思われる。この方法は，現在でも全部族的規模で催される共同祈願 (*lam*) において続けられている。

さて，雨の首長は，ジュオクが授けた力と，代々蓄積した雨石と雨薬の所有と使用とによって雨をコントロールすると述べた。それが首長としての権威の源であることは間違いない。しかし，次に注意したいのは，雨の首長は雨をコントロールする力をただひとりで独占しているわけではないという事実である。というのは，彼以外の人でも，雨薬を入手することによってその力を身につけることが可能なのだ。これは，パリ社会における雨をめぐる社会的葛藤を考える上で，きわめて重要なポイントである。この事実ゆえに様々な葛藤が生じるといっても過言ではない。

そこで以下では，雨の首長以外の人物による雨薬所有の例をふたつとりあげる。

＜長老アニャラによる雨薬所持＞

ニランにはウコス (Ukoth) という兄がいたが若くして死んでしまった。それで，首長位はニランが継承したのである（図5）。ウコスの息子ニャンギロ (Nyangilo) は，コル集落の首長からニャマル (Nyamaru) あるいはニムモル (Nyimmoru) という名の雨薬を手に入れた。ニャンギロは，彼にとって父方イトコにあたる当時の雨の首長グムマル (Gummar) と協力して，雨を順調に降らせるよう努めたという（図5参照)。しかし同時に，ニャンギロは首長になる野心を抱いており，グムマルと競いあったといわれている。

やがてニャンギロが死ぬと，雨薬は妻アピーディ (Apiidhi) が相続した。次いでグムマルも死に，ウガン (Uŋaŋ) が雨の首長となった（図5）。アピーディは雨薬を用いて降雨を妨害したという非難をうけ，その結果，1960年代前半に殺されてしまう。雨薬は息子アニャラ (Anyala) が相続した。ウガンの息子ピデレが雨の首長であった時代には雨は順調で問題はなかったが，彼が死に，第一夫人のニブル (Nyiburu) が後を継ぐと，アニャラは自分が首長になる画策を始めたという。そして，ニブルとアニャラの二人は，1982～84年の紛争の主役をつとめることになるのである。これについては次章で詳しく述べる。

以上のように，ニャンギロとアニャラという首長筋の傍系出身の父子が，雨薬を所持していたために，4代にわたる首長との間で様々な葛藤が生じてきたのである。それは，首長の座をめぐる権力闘争であったと言えるのではないだろうか。そして，ニ

ャンギロの妻は殺され，アニャラが村を追放されたことから明らかなように，この争いはニャンギロ側の敗北に終ったのである。

ニャンギロとアニャラに関する以上の記述は，首長筋の人々，つまり，アニャラを追放した側の説明に拠っている。1985年6月に，ジュバの町でアニャラ自身から直接聞いた説明は，それとは大きく異なっていた。アニャラは，彼も父のニャンギロも雨薬を所持したことは一度もなく，それは首長筋の人々が捏造した言いがかりにすぎないと述べた。ここでは，真実がいずれの側にあるかの詮索はやめておく。アニャラを追放した，パリの多くの人々にとっては，ニャンギロ-アニャラによる雨薬の所持は現実的な事実であったと認識されていたこと，このように雨薬の所在は常にあいまいであることの二点が，本論の考察にとって重要である。

＜コル集落首長マティアによる雨薬所持＞

次に，コル集落の首長による雨薬所持の例をみてみよう。コルの首長は，殺人事件調停者のシンボルである儀杖リクエリ (*likweri*) の継承者として，パリ社会内で雨の首長に次ぐ重要な地位を占めている。また，コルはブラ，プチュワ，プゲリ，アングルメレ，ウィアトゥオの五集落が雨の首長の下にあるのに対して，独立した状態を保ってきた。その意味で，コルの首長は雨の首長と対等な社会構造上の地位を占めているといえる（[栗本　n.d.] 参照）。

しかし，コルの首長は雨の首長ではないから，雨をコントロールする力を持ってはいなかった。ピデレが雨の首長であった時期，コルの畑に雨が降らないことがたびたびあった。コルの人々はこれを，ピデレの傘下に入らないコルに対するピデレのいやがらせであると理解した。そこで，ウィアトゥオ集落の干渉から自衛するために，コルのモジョミジ階梯は自ら雨薬を持つことを決定したのである。

1970年代に，キラン (Killaŋ) 年齢組とアニュワ (Anywa) 年齢組によって何種類かの雨薬と雨石がロトゥホとアチョリの雨の首長から購入され，コルの首長マティア (Mattia) の下に保管されていた。マティアはこれらの雨薬を駆使して，ウィアトゥオに対抗し，コル集落に十分な雨を降らせるよう努めてきたのである。

しかし，次章で述べるように，マティアはかんばつの責任を負わされて，1984年9月に村を追放される。そのさいに，雨薬の所在が問題の焦点となったのだが，マティア自身と彼を弾劾し追放を決定したモジョミジ階梯のあいだで，大きな見解の相違があったことは，アニャラの場合と同様である。

これら二つの例から明らかなように，パリ社会では，雨薬を獲得することによって，

雨の首長以外の人でも雨をコントロールする力を持ちうるのである。そして，この力を身につけた人は，雨の首長とある種の競合関係に置かれることになる。

雨の首長に関しては，その職務とそれに対する報酬について説明しておく必要がある。毎年4月頃，雨季が始まると，雨の首長はモロコシの播種の日を決定する。その日には，全部族が総出で種まきを行なう。播種の直後には雨が必要である。さもないと，モロコシの種子は芽ぶかないまま枯死してしまい，もう一度播種を行なわねばならない。したがって，雨の首長は播種のあと，順調に雨を降らせる責任がある。彼の仕事は，モロコシが成育し，無事に収穫が終了するまで，適度の雨が降るようにすることである。

この仕事に対する報酬として，雨の首長は毎年多くの財とサーヴィスの提供を人々からうけている。最近では，6集落のモジョミジ階梯はそれぞれ毎年牛1頭と現金10スーダンポンド[15]，合計牛6頭と60ポンドを雨の首長に支払っていた。また，コルを除く5集落のモジョミジは，毎年首長の畑を耕作していた。首長の畑は5つに分割され，各集落に割り当てられているのである。さらに，首長の屋敷の新築・修理も5集落のモジョミジが無償で労力を提供して行なわれる。

したがって，先代の雨の首長ピデレは，多数の牛と豊富なモロコシに恵まれ，5人の妻を娶っていた。パリ社会は複婚制とはいえ，過半数の男はひとりしか妻をもたない。自分の畑の農作業，屋敷の建設に多くの労働量を費やすことを考えれば，雨の首長は大きな特権を享受しているといえる。貧富にもとづく社会の階層化が未発達な，平等主義的なパリ社会のなかで，雨の首長は社会経済的に突出した唯一の人物なのである。

ここで，雨の首長との関係上，コルの首長について述べておかねばならない。他の5集落と社会構造上対等な地位を占めるコル集落は，数年前まで雨の首長へのいかなる財とサーヴィスの提供も行なっていなかった。そのかわり，コルのモジョミジ階梯は，コルの首長の畑の耕作と彼の屋敷の新築・修理に労力を提供していた。ただし，首長に対する牛や現金の贈与は存在しなかった。

しかし，アニュワ年齢組がモジョミジ階梯の頭になってから，コルも雨の首長に牛と現金を贈るようになった。その一方で，コルの首長の畑の耕作は続けられた。したがって，この数年間コル集落は自分の首長と雨の首長とに，いわば二股をかけた状態にあった。その後，1983年から，ついにモジョミジはコル集落の首長の畑を耕作することを放棄してしまった。つまり，コルのモジョミジ階梯は，自分たちの首長にはほ

15) 1スーダンポンドは約130円（1984年の換金率による）。ちなみに，小学校教員の月給は約60ポンド，牛1頭は約150ポンドである。

とんど財とサーヴィスの提供はせず，雨の首長に対しては牛と現金の贈与は行なうが，労役の提供はしないという新しい態度をとったのである。

以上の一連の変化は，コルの首長の独立した権威が揺らぎ，雨の首長の一元的な権威のもとにパリ全体がおさまっていく過程と捉えることも可能だろう。しかし，この過程はコルの首長マティアにとっては，自分の既得権に対する明白な侵犯であったはずである。後にみるように，マティアとコルのモジョミジ階梯の緊張関係は，1984年に入って表面化する。

まとめると，雨の首長の権威は，雨薬を所持する別の人物によって脅かされる危険をたえずはらんでいる。その一方で，雨の首長はパリ全体の降雨に責任をもち，その責任を全うすることへの報酬として財とサーヴィスの提供を享受している。

それでは，もし，雨の首長が職務を全うできないばあい，つまり降雨が順調でないときにはどうなるのだろうか。そうしたばあい，人々は彼が仕事を怠っていると感じる。そして，雨の不順が続けば，人々は雨の首長に対して怒りさえ抱くようになる。なぜなら，常々財とサーヴィスを捧げ，破格の待遇を与えているのに，職務を怠るとはもってのほかであると考えられるからである。したがって，降雨が本来きわめて不規則なこの地域では，雨の首長は人々の憎悪・糾弾の対象になりやすいといえる。

c.　チエン（死霊の復讐）

パリ社会では，雨の首長と雨薬の保持者のみが，降雨をコントロールする力を持っているわけではない。他にも降雨を左右する手段が存在する。チエン (*cien*) はそのひとつである。

チエンとは何か。この概念は他の西ナイロートにも広く分布し，英語では ghostly vengeance[16] という訳語があてられている。「死霊の復讐」と訳せようか。パリでは，すべての人は死ぬ前にグエス (*gweth*) かチエンを言い残すことが期待されている。この両者は対概念である。グエスは，後の残された者たちに繁栄と平安が訪れるようにという祝福であり，チエンは，逆に彼らが災厄にみまわれることを願う呪いである。グエスとチエンは，単なる観念上の存在ではなく，きわめて現実的なものであり，生者を大きく拘束している。

それゆえに，パリの人々は，ある人が死ぬ前に何を言い残したかという「死の状況」[17] に高い関心を抱いている。グエスは，死の床に集まった人々に対して明確に表

16) 例えば，アニュアクにおける ghostly vengeance については，[Lienhardt 1962], [Evans-Pritchard 1953]，ケニヤ・ルオに関しては，[Evans-Pritchard 1950; 阿部 1979, 1983: 621-623] を参照のこと。

17) この用語は Lienhardt [1962] に拠る。

明される。それに対して，チエンは表明されないか，されるにしてもある個人にだけ告げられるのがふつうである。そして，チエンを聞かされた人はかたく口どめされ，もし口外すると死んでしまうと信じられている。つまり．ある人がじっさいにどのようなチエンを残したかを知るのは，ほとんど不可能である。

しかし，生前不幸な人生をおくり，他者ともいい関係にはなかった人が，沈黙したまま死んだとしよう。そうすると，1，2年のあいだに，彼または彼女がチエンを残したと人々が信じるようになる確率は高い。ある人がチエンを残したという事実は，死後に確認されるわけである。このことは，更に説明を要する。

チエンは，特定の個人だけでなく，集落，部族共同体全体にも災厄をもたらすことができる。また，パリと敵対する他部族を呪うことも可能である。そして，個人あるいは集団が事故，疫病，火事，かんばつ，他部族による略奪にみまわれると，人々はいったい誰のチエンが災厄をもたらしたのかを考え始める。つまり，災厄が訪れてはじめて災因を追求するわけである。彼らは，最近死んだ人々のなかから，チエンを残した可能性のある者をリストアップする。その上で，モジョミジ階梯は，衆議の一致を待って犯人が誰かを決定するのである。

チエンをうけた（と思われる）個人はアジュワ（占師，治療者）による診断，治療をうけることができる。しかし，治療はいつも成功するとは限らない。治療にもかかわらず，チエンのために死ぬことは多い。

自分を憎んでいた人が沈黙のまま死ぬと，本人はその人がチエンを行なったにちがいないと感じることがある。けれども，彼のとりうる予防・自衛手段は存在しない。しかし，チエンが効力を発揮するのは，死後約2年間程度なので，その期間を無事にすぎれば，彼はだいじょうぶということになる。

それに対して，チエンが集落や部族共同体にかかわる場合は，対抗手段をとりうる。すなわち，かんばつや他部族による家畜の略奪にみまわれると，モジョミジは合議の上，誰がチエンを残したかを決定する。この最終決定にはアジュワ（占師）が関与する。そしてモジョミジは，チエンを残した人の墓を暴き，遺体を村の外に遺棄する。そうすれば，チエンの力は消滅すると考えられている。

ところで，チエンを行なう力は，人の胃の中に存在するとみなされている。この点で，人間の胃（おそらく動物の胃も）はパリにとってきわめて重要な器官である。それは，単なる消化器官ではない。次章では，人々が胃をいかに扱うか，その実例をみることになる。

以上のように，チエンは様々な災厄の原因として生者の世界に影響を及ぼす，現実

的な力である。また，ある人が死の床で言い残すことは，その人の生前の社会関係を総決算した結果であるともいえよう。総決算がマイナスの人はチエンを，プラスの人はグエスを残すのである。その意味において，パリの人々は「死の状況」，つまり死者の人間関係に高い関心を抱いているといえる。

最後に，チエンを残した人の告発は，被告が死者であるという点に特徴がある。俗に「死人に口なし」と言うが，死者には弁明のチャンスがない。そのために，生者が弾劾される妖術や邪術における告発と比べると，死者を告発しその墓を暴いても，現存する社会関係にヒビを入れる結果を招くことは少ないといえるのではないだろうか。

d.　アジュワ（占師）

アジュワ (*ajwa*, Pl. *ajuu*) というのは，占師，病気の診断者，治療者の全部，あるいはそのいずれかを職能とする人のことである。男女両方がなりうるが，女性のアジュワのほうが多い。アジュワとしての能力は，ジュオクから授けられたものと考えられており，父系，母系の両方によって継承されうる。

ふつう，アジュワは雨をコントロールする力を持つと考えられているわけではない。しかし，次章でみるように，雨をめぐる紛争のなかで，アジュワはしばしば重要な脇役として登場する。彼または彼女らは，モジョミジ階梯の求めに応じて，かんばつの原因を占ったり，雨を止める力をもつ呪物を与えたりする。また，ある事例では，アジュワ自身が短期間ではあるが，雨の首長的役割を果した場合もあった。これらの事例については次章詳しく述べる。ここでは，アジュワも雨をコントロールする力を持つとみなされる場合もあることを指摘するにとどめておく。

3.　降雨の因果論の特性

パリの人々にとって，降雨は単なる自然現象ではない。究極的には雨はジュオクによってもたらされ，人智・人力の及ぶ問題ではないのだが，現実には雨をコントロールしうる特別な力が存在する。それで，雨が不順でモロコシの成育に悪影響が現われるような時には，人々は雨を妨げている，あるいは降らせすぎているものはいったい何だろうと考え始めるのである。

その場合，推論の可能性は，今まで述べてきたようにいくつかありうる。まず第一に，雨の首長が仕事を怠けているのかもしれない。しかし，首長が懸命に努力しても成功しない時には，別の人が保持している雨薬のせいで，雨が妨げられているのかもしれない。また，最近死んだ人のチエンが原因の可能性もある。つまり，降雨の因果論は「一元的」ではなく「多元的」である。

パリの人々は，雨の不順を説明しさらに解決する，納得のいく因果論を見つけ出すまで，原因追求の試みを続ける。そして最終的には，その因果論の妥当性は，論理的整合性によってではなく，結果的に順調な降雨が回復するか否かによって検証されるのである。つまり，彼らはいったん雨の秩序が破壊されると，その秩序が回復するまで因果論を探し求める。それは，しばしば深刻な社会的葛藤と時には殺人に至る暴力を創出する，決して平担ではない試みである。

これまでの本論は，いわば導入部にすぎない。次章では，降雨の因果論追求の試みが，じっさいにいかなる過程をたどったのか，1982年から85年に至る4年間を例にとって記述，検討する。

Ⅲ．紛争の記録：1982—1985年

1.　雨の首長ピデレの死と妻ニブルによる継承

1980年5月，雨の首長であったピデレがコレラを患い死亡し，第一夫人のニブルが後を継いだ。本来なら，長男が首長位を継ぐところだが，当時彼は20才前後で若すぎたため，息子が成長するまで暫定的に母が首長位に就くことになったのである。これは，ピデレの遺志であった。ピデレが保持していたすべての雨薬と雨石はニブルに渡されたといわれている。

雨の首長のみならず，各集落の首長も含めて，女性が首長に就任することは，パリでは異例のことである。おそらく，過去においてもほとんど例がないと思われる。男性原理と女性原理が，きわめて明確に区別されているパリ社会において，女性首長はどのような位置を占めていたのだろうか。

序論で述べたように，モジョミジによって催される会議には雨の首長の出席が不可欠である。そして，この会議は，原則的に女性が排除された男性中心の場である。ニブルは在位中，モジョミジが開く会議には同席しなかった。したがって，モジョミジによる紛争の調停や意志決定に関与する首長としての役割を，彼女は果していなかった。

ニブルの雨の首長としての役割は，雨をコントロールする仕事に限定されていた。その意味で，彼女は変則的な首長であったといえる。この変則性は，彼女が雨の首長に就任したとき，何の儀礼もとり行なわれなかった事実からもうかがえる。本来なら，新首長の誕生にさいしては，ロニ (*rony*) と呼ばれる大規模な即位儀礼が執行されるのである。

1982年から84年にわたる雨をめぐる紛争のなかで，ニブルが告発の焦点となり，ついには殺害されるに至った背景のひとつに，彼女の首長としての変則性があることは否定できないと思われる。

2.　1982年：大不作の年

1)　ウィアトゥオ，ブラ両集落間の紛争

この年，4月に雨が降り始め，モロコシの播種が行われた。しかし，播種後雨は止まる。やがて，ブラとプチュワ集落の畑には雨が降り，モロコシは成長し始めるが，他の集落の畑は依然雨不足であった。

ブラ集落以外の人々のあいだで信じられている話によると，それに先立つ3月，ブラ集落の5人のモジョミジは，ブラに居住する女性のアジュワ（占師）であるアクドゥ (Akudu) に面会した。そして，ブラ以外の集落の畑には雨が降らないようにするにはどうすればいいか相談したという。彼らは，食料不足に陥った他集落の人々が，家畜をブラの余剰モロコシと交換し，その結果自分たちの家畜が増え豊かになることを期待したのである。

アジュワのアクドゥは，仔犬を槍で前後2つに裂き，それぞれプゲリとウィアトゥオ集落の畑に埋めるように指示し，5人のモジョミジのひとり，ウルム (Ulum) は仔犬の頭のほうをプゲリの畑に埋めにいった。その時，彼はプゲリ集落の人々に見つかり，村に駐在する警官のところへ連行された。しかし，ウルムは尋問を受けることもなく釈放された。

播種後，雨が降らないため，6集落のモジョミジ階梯は，ニブルのもとへ不平を言いに行った。ニブルは，アクドゥのせいで雨が降らないのだと説明し，ブラのモジョミジに，仔犬の頭部が埋められたプゲリの畑へ黒い雄羊を連れて行き，そこで屠殺するように告げた。ブラはすぐに実行し，羊が屠殺された日の午後，プゲリに人々は2度目の播種を行なった。

以上のできごとは，ブラ集落の人々の陳述によると全く異なる様相を呈している。彼らによれば，まず3月，プゲリ集落の少年たちが，村の外，ブラとプチュワ集落の境界付近で，灰が入った空缶を発見した。ブラのモジョミジは，その空缶をアジュワのアクドゥのもとへ持っていき，これはいったい何を意図したものか尋ねた。彼女は，誰かがブラに雨が降らないようにするため空缶を置いたのであると答えた。モジョミジは，空缶はプゲリの少年たちに発見されたので，犯人はプゲリの人々にちがいないと考えた。そこで，彼らはプゲリに報復するために，灰と犬をプゲリの畑に埋めるこ

とにした。そして，これを実行に移したときに，プゲリの人々に見つかってしまう。

プゲリの畑で，埋められる寸前に見つけられた仔犬の意味づけに関して，ブラ集落とそれ以外の人々では，まったく見解が異なっている。考えてみれば，紛争の当事者双方のあいだで，見解の対立があるのは当然のことであり，今後そうした例をいくつもみることになる。ここでは，双方の陳述に真偽の判断は差し控え，論を先に進めることにする。

羊の屠殺後，プゲリには雨が降ったが，ウィアトゥオ集落の畑には依然として雨が降らなかった。5月15日，ウィアトゥオのモジョミジは，再度ニブルに会い不平を述べた。ニブルは，雨を妨げているのはアクドゥ（ブラの占師）なので，彼女のところへ行くように求めた。しかし，モジョミジはこれを受け容れず，「我々はアクドゥとではなく，おまえ（ニブル）と話し合いたいのだ」と言った。

5月23日，ウィアトゥオのモジョミジ階梯は，ニブルとアニャラ（第2章で述べた，雨薬を保持しているとみなされている男）を呼びだした。モジョミジは，彼ら2人に，雨を妨害しているのはおまえたちだと告げた。そして，雨の首長の権威の象徴のひとつである儀杖リクエリをまたぐよう命じた。リクエリをまたぐことは，自分が嘘をついていず潔白であることを示す行為である[18]。ニブルは4回，アニャラは3回，地面に横たえられた儀杖リクエリをまたいだ。4は女性，3は男性と象徴的に結びつけられている数字である。

5月25日，ウィアトゥオのモジョミジは，集落のすぐ外側にあるブンダレット(Bundaret)という場所で会議を開き，ニブルとアニャラの両名を撲つことを決定し，両名とアニャラの妻の3人は棒と笞でぶたれた[19]。ニブルは，雨を妨げているのは自分たちではなく，アクドゥである，彼女をここに連れてきて欲しいと弁明した。ニブルの要望は聞きいれられ，モジョミジはアクドゥを捕え，ウィアトゥオに連れてきた。

アクドゥは棒と笞でぶたれた。そして，ついに彼女は，ブラ集落のアニュワ年齢組に属する5人から，ウィアトゥオに雨を降らないようにしてくれという依頼をうけたこと，およびその5人の男の名前を白状した。そこで，ウィアトゥオ集落のモジョミジは，マダン（若者年齢階梯の最年長年齢組，図3参照）をブラに派遣し，5人を連れてくることにした。マダンの若者たちは，5人のうち2人を見つけだし，連行した。2人の男は，マダンにひどくぶたれたのち，午後3時頃ついに死亡した。

18）リクエリは本来，殺人事件の調停に用いられる。調停の場では，殺人者側の親族と被害者側の親族との中間の地面に横たえられる。何人もこれをまたいで反対側へ行くことは許されない。つまり，このばあい，リクエリは報復闘争に陥る危険のある双方の親族を分離する役割を果している。

19）ふつう，夫が雨薬を保持していると，妻もその使用に関与しているとみなされる。

2人の死を知ったブラのモジョミジは警察に通報した。警察はウィアトゥオ集落から125名を拘束し，派出所へ連行した。この中から9名の代表が選ばれ，後に，約1000 km離れた県庁所在地トリットに護送され刑務所に拘置された[20]。

同日，死者のひとりの兄は，弟の死に激怒し，弟の名をウィアトゥオに漏らしたアジュワのアクドゥを斧で撲殺した。しかし，この兄は罪を問われることはなかった。けっきょく5月25日の事件は，3人の死者を出したのである。

2)　長老アニャラと雨の首長ニブルの逃亡

6月に入っても，ウィアトゥオ集落の畑には雨が降らなかった。ニブルと共にかんばつの責任を問われたアニャラは，身の危険を感じ，5日にトリット (Torit) へ逃亡した。12日にモジョミジは再々度ニブルを召喚し，もし雨を降らせなかったら，ピデレの墓を暴き，彼女を殺すという警告を与えた。

6月21日，死を目前に感じたニブルは，村を逃亡した。彼女は，徒歩で西に約80 km離れたナイル河畔の町モンガラ (Mongalla) に到着し，さらに，ジュバ (Juba) を経て，長男が働いていたザイール国境に近い町イエイ (Yei) に落ち着いた。この結果，パリは雨の首長不在の状態に陥ったのである。

アニャラとニブルの逃亡後，一部の畑には雨が降ったが，他ではかんばつが続いていた。7月末から8月中旬にかけては，ウィアトゥオの畑の3カ所から，ブラ集落のモジョミジが埋めたと思われる仔犬の死体の一部が発見されたという。

ウィアトゥオのモジョミジは，状況を打開するため，アチョリから新しい雨の首長，ルドルフォ (Rudolfo) を招くことを決定した。彼は8月3日にパリに来訪した。ルドルフォはピデレの友人で，ピデレは彼から雨薬を得たこともあった。

ルドルフォは自分の雨薬をたずさえてパリに来たが，この雨薬はきわめて強力であり，すぐに激しい雨が降りはじめた。この雨のおかげで，ウィアトゥオの一部の畑は，ようやく播種を行なうことができた。8月の播種は異例である。NCA (Norwegian Church Aid, トリットの町に基地を置き広範囲にわたる援助活動を行なっている) が特別に支給した，セレナと呼ばれる早生モロコシの種が蒔かれた。ルドルフォの雨薬は強力すぎて，そのせいで彼の来訪直後，ウィアトゥオでは32名の子供たちが死んでしまったという。

さて，8月に降りだした雨は，9月になっても止まらなかった。モロコシは収穫期に入り，もう雨は必要なかった。モジョミジは，ルドルフォに雨を止めるよう要請し

20) 拘置された男たちは，やがて脱走して村に戻ってきた。彼らは，警察・政府からそれ以上の追及を受けることはかなった。南部スーダンにおける，国家統治機構の弱体ぶりを物語るエピソードである。

た。しかし，雨はなお降り続いた。そこで，モジョミジはルドルフォの追放を決定した。9月中旬，1カ月余の滞在後，彼はパリを去りアチョリに帰った。パリは再び雨の首長不在の状態へと戻ったのである。

1982年，私は9月8日に村入りした。当時はアチョリから来た雨の首長ルドルフォがまだ村におり，季節はずれの雨が降り続いていた。したがって，この年の紛争に関する記述のほとんどは，事後の聞き取りに基づいている。

この年のモロコシの出来高は，最近10年をとっても最低であった。翌年の収穫前には大きな飢饉が到来することが予想された。雨の不順が不作の主要な原因であったと思われる。たしかに，表1をみると，この年の年間降水量はむしろ多い。しかし，モロコシの成育期にあたり，最も雨の必要な6～8月には雨が少なかったのである。雨量が計測されたラフォン R.D.C. は，プゲリ集落の領域に属するが，R.D.C. 周辺はむしろ雨に恵まれたほうである。ウィアトゥオ集落の畑ではもっと少なかった。

また，この年には，8月にハタオリドリ (weavers) の大群が飛来し，特にプゲリとコルの畑に致命的な打撃を与えた。これも不作の原因のひとつである。さらに，9月末から10月にかけては，2期作めのモロコシの開花・受粉期にあたった。しかし，この時期に大雨が降ったため，花粉は流されてしまい，ほとんどのモロコシは受粉できなかった。コル集落の畑では，冠水のためにモロコシは立ち枯れてしまった。この結果，2期作めのモロコシの収穫はほとんどゼロになってしまった。1982年は，パリにとって近来まれな不作の年であった。

3.　1983年：飢餓と紛争

1)　アニャラとニブルの帰村とアニャラの再逃亡

1月末，乾季のさかりに私は村を去った。したがって，この年の事実経過は，1984年8月に再訪してから確認したものである。パリでは，前年の9月以来，雨の首長不在の状態が続いていた。4月に入り，雨季が近づくと，モジョミジは4月15日に播種を行なうことを決定した。ふつう播種の日どりは雨の首長が決定する。この年は首長不在のため，モジョミジが代行したのである。

しかし，播種後，4月が終り5月に入っても雨は降らず，モロコシは芽ぶかなかった。R.D.C. の記録をみても，5月の降雨はわずか 10 mm にすぎない。

何らかの対応策を迫られたウィアトゥオ集落のモジョミジ階梯は，ついに，ニブルとアニャラの2人を村に呼び戻すことに決定した。当時，トリットの町にいた2人のもとに，長老階梯に属するキランとクワラ年齢組のメンバーが使者として派遣された。

モジョミジと彼ら2人の関係は険悪だったので，中立的な立場にあった長老が使者に選ばれたのである。2人は長老たちの説得に同意し，5月中旬に村に戻った。

ニブルとアニャラは，帰村後協力して雨を降らせるよう努力した。けれども，5月末を迎えても依然として雨は降らなかった。この頃から飢餓が深刻な問題になりはじめた。昨年の不作のせいで，モロコシの蓄えはそろそろ底をつきだしたのである。飢えは目前に迫っていたが，次の食糧をもたらすべきモロコシは，まだ芽も出ていなかった。モジョミジの間では，ニブルとアニャラの両名が戻ったのに，どうして雨が降らないのかという疑問が高まってきた。そして，ウィアトゥオ集落のモジョミジは，雨を妨害しているのは，1980年に死んだ雨の首長ピデレのチエンであるという結論に達した。

6月4日，ピデレの墓は暴かれ，遺体は村の東を流れるコス川に棄てられた。

その後，雨が降りはじめ，6月8日，人々は再びモロコシの種を蒔いた。6月にはかなりの雨が降り (R.D.C. の記録では 180 mm)，モロコシは成育しはじめた。しかし，飢餓はますます深刻になり，確かな数は不明だが，多くの人々が縁故を頼って村から流出するようになった。また，牛を所有している者は，ジュバの家畜市場で牛を売りさばき，得た現金でモロコシを購入し飢えをしのいだ。

7月に入り，再び雨が止んだ。ニブルとアニャラの2人は，雨が降らない原因をつきとめるため，イリガ (Iriga; 女性) という名のロトゥホ族出身のアジュワ（占師）のもとへ赴いた。イリガはふだん，トリットの町にいるのだが，当時村に滞在し，アジョワとしての仕事をしていた。つまり，町から出稼ぎに来ていたわけである。ニブルとアニャラは，キラン年齢組の2人の男，ウディエガ (Udhiega) とアプーダ (Apuudha)，を伴った。彼らはそれぞれ，コル集落とウプゲリ集落の長老である。

イリガは，4人を前にして，しかもアニャラの面前で，雨を妨げているのはアニャラであると判じた。しかし，彼らはこの判定を誰にも他言しなかった。

話は前後するが，ニブルとアニャラ以前に，ウィアトゥオのモジョミジ階梯の代表はイリガに会いに行っている。彼らは，墓を暴いたピデレが，ほんとうにチエンを残したのかどうか確信を持てなかったので，それを確かめようとしたのである。イリガは，ピデレはチエンを残してはいないと判定した。したがって，かんばつの原因は他に求められねばならなくなった。

7月，ウィアトゥオのモジョミジは，全モジョミジ階梯を召集し，ングレロ (ŋulero) で会議を開いた。ングレロはコルとプゲリ集落の中間にあり，レロ (*lero*) の大木が茂っている。ニブルとアニャラの2人が換問された。

この会議においてはじめて，ニブル，アニャラと2人のキラン年齢組の長老がアジュワに会いに行ったこと，アジュワは雨を妨げているのはアニャラであるという判定を下したことが明らかにされた。2人の長老は，判定をモジョミジに報告しなかった罰として，それぞれ1頭の去勢牛を支払うことを命じられた。2頭の牛は，ただちに会議の場に連れてこられ，その場で槍によって屠殺された。そして，モジョミジは，ニブルとアニャラに対して，雨を降らすようにもう一度努力せよと命じた。

2人の長老に対する制裁が意味しているのは，ニブルとアニャラが，モジョミジ階梯を無視して長老を伴ってアジュワのもとに赴いたことが，モジョミジにとって大きな侵犯であったという事実である。

会議の終了後，2頭の牛の肉はモジョミジと長老階梯に分配され，その場で焼いて食べられた。

さて，ニブルとアニャラの2人は，会議の日の夕方，それぞれの家に閉じ込められた。モジョミジは，2人が雨を降らせる仕事に集中することを期待したのである。しかし，アニャラは深夜のうちに家の壁に穴をうがって脱走した。壁に穴をあけるのはひとりの力では困難なため，誰かが手助けしたにちがいないと思われている。彼は夜道をたどり，後にトリットにたどりついた。この逃避行以来，アニャラは一度も村に戻ることなくトリットに滞在している。

アニャラの逃亡後，パリでは雨が降り始めた。そのため，人々は雨を妨げていたのはやはり彼であったと確信したのである。

2)　飢餓と豊作

7，8月，パリの人々を飢餓から救うため，NCA は大量のモロコシを協同組合を通じて供給しはじめた。それで，人々は協同組合から安価な価格で必要なモロコシを購入できるようになり，最悪の事態は避けられたのである。モロコシ購入の現金を得るため，大量の牛が売却された。NCA の見積りによると，総数は1500頭に達するという。飢餓以前，牛の総数は6，7000頭であったと考えられるから，パリは全体の2割以上の牛を失ったことになる。しかし，餓死者は，乳幼児を除けば，ひとりもでなかった。

7，8月にかけて，モロコシは順調に育ち，出穂・結実期を迎えた。9月に入ると，人々はまだ乾燥していない収穫前のモロコシと甘味のあるモロコシの茎を食べ飢えをしのいだ。例年ならば，9月に収穫が行なわれるが，この年はかんばつで播種が遅れたため10月になった。モロコシの出来は，最近数年間で最高のものだった。人々は新モロコシで醸されたビールに酔い，しばらくは雨の問題を忘れることができたのである。

4.　1984年：首長の殺害，追放

1)　雨の首長ニブルの殺害

この年の雨のパターンは，前年に似ていた。4月に雨が降り始め，播種が行なわれたが，5，6月に入ると雨は止まってしまった。R.D.C. の記録によると，降水量は4月 91.3 mm，5月 35.6 mm，6月 78.8 mm である（表1）。二度目の播種が行なわれたが，雨不足のため芽は出なかった。

この時期，ウィアトゥオ集落のモジョミジは，かんばつの原因が1983年に死んだあるキラン年齢組の男が残したチエンにあるという結論に達し，彼の墓を暴き遺体を遺棄している。

6月には，ウィアトゥオのモジョミジが，2度にわたり全モジョミジ階梯を召集し，ングレロで会議を開いた。ニブルが召換され，彼女とモジョミジとの間で以下のようなやりとりが交わされたという。

モジョミジ：なぜおまえは，ちゃんと雨を降らさないのか。

ニ　ブ　ル：私は全力を尽してきた。しかし，雨は降らない。ジュオクが雨を妨げているのだ。

モジョミジ：おまえは私たちを欺いている。おまえは全力を尽してはいない。家に戻れば飲んだくれているだけじゃないか。もし，雨を降らす気がないのなら，雨薬を私たちに引き渡してもらおう。

ニ　ブ　ル：ピデレが死ぬ前，私は彼から雨石だけを受け取った。雨薬が今どこにあるか知らない。

モジョミジは，2度の会議において，雨を降らすため全力を尽せという強い警告をニブルに与えた。しかし，だんだんと彼らの目には，ニブルは雨を降らす気がないように映ってきた。それで，モジョミジの関心は，ニブル個人ではなく，雨薬に集中していくことになった。つまり，ニブルが雨薬を保持していても宝の持ち腐れになるので，自分らで管理したほうがよいと考えたのである。けれども，ニブルが雨薬を所持しているのかどうか，会議では明らかにならなかった。

会議中，モジョミジの発言にあったように，6月から7月8日に死ぬまで，ニブルはほとんど毎日酒を飲み続けた。そのためモジョミジは，彼女が本来の仕事，つまり雨を降らせることを怠けて酒ばかり飲んでいるといって非難した。しかし，じっさいには，モジョミジ自身が，彼女の歓心を買い雨を降らせる仕事をしてくれることを願って，ニブルに酒代を与えたのだった。15ポンドの現金と1斗のモロコシが各集落から徴集され，彼女に奉じられた。彼女は，それでモロコシビールとワラギ（*waragi*）

と呼ばれるアルコール度の強い蒸溜酒を手に入れたのである。

ニブルは，何を思って酒に酔っていたのだろうか。彼女の心境を窺わせる，次のようなエピソードが語られている。

ニブルが自分の家にいるとき，数羽のコウモリが彼女の目の前に塊になって落ちてきた。彼女はそれを見て，「私は今年死ぬだろう」と言った。この常ならぬ出来事を，彼女は自分の運命を暗示する凶兆と捉えたのである[21]。このかんばつの時期，ニブルは自分の死を覚悟していた。より慎重な言いかたをすれば，少なくとも，こうしたエピソードを語っているパリの人々は，彼女の心境をそのように捉えていた。

7月に入っても，依然として雨は降らなかった。6月に再び雨が降り始めた前年より，状況はさらに悪かった。7月6日，ウィアトゥオ集落のモジョミジは，翌日3度目の会議をアゴーラ (Agoola) で開くことを全集落に通告した。畑仕事には行かず，全員が村にとどまるようにという指示も付け加えられた。

アゴーラは，ウィアトゥオ集落のすぐ外側一帯の地名である。ここは，すぐ隣りにあるブンダレットと共に，雨の問題のような深刻で重大な問題が討議される場である。6月の2度の会議はングレロで催された。ングレロでは，より重大でない問題が討議される。つまり，会議の場が，ングレロからアゴーラに移ったことは，状況がより厳しくなっていることを表わしていた。ある人が何らかの罪を犯し，その問題がブンダレットやアゴーラで議論されることになると，被告は暴力を含む厳しい制裁を覚悟しなくてはならないといわれている。

7月7日，アゴーラには，モジョミジ階梯ばかりでなく，長老，若者，女性，子供たちも集った。モジョミジとニブルの間で，以下のような切迫したやりとりがあった。

モジョミジ：なぜ，雨を降らさないのか。

ニ　ブ　ル：私は努力してきたが，だめなのだ。

モジョミジ：今やおまえは雨を降らすのを拒んでしまった。おまえは丘をひっくり返すつもりだ。われわれは，おまえを殺す。それから，われわれはこの地を去るだろう。(旅についていけない) 子供たちは死ぬだろう。

このモジョミジの発言には説明が必要である。「丘をひっくり返す」と言うとき，その丘はパリの人々が居住するリプルの丘を指示する。そして，この比喩は，部族共同体全体が崩壊してしまうことを意味する。食物がなく，村が崩壊してしまえば，もはやリプルの丘にとどまる理由はない。人々は流浪の旅に出るだろう。

21) 一般に，コウモリは運命を暗示する動物と考えられている。例えば，狩りの前夜にコウモリが出現すると狩りは成功するという。また，まれなことだが，コウモリに咬みつかれた人は，それを自らの死の予兆と捉えるという。

以上のやりとりのあと，興奮したマダン年齢組の若者たちが，棒と笞でニブルを撲ち始めた。しかし，モジョミジはこれをおしとどめた。そして，ニブルは雨薬について次のような告白をする。

ニ　ブ　ル：雨薬はわたしが持っている。要求どおり，おまえたちに渡そう。

モジョミジ：いいや。われわれは雨の首長ではない。雨薬をもらったところで使い方を知らない。雨を降らすのはおまえだ。

しかし，ニブルは雨薬を引き渡すため，アゴーラからウィアトゥオ集落にある彼女の家に連れ戻された。

モジョミジが見まもるなか，ニブルは9個の雨石を取り出した。けれども，前言を翻して，雨薬はないと言った。怒ったモジョミジの何人かは，ニブルを撲とうとしたが，おしとどめられた。モジョミジは，ニブルに告げた。「雨薬を渡しなさい。さもないとおまえを殺す。しかし，もし渡したなら殺さないだろう。」このとき，ニブルは恐怖で体を震わせていた。

その後，この場にはウィアトゥオ集落のモジョミジだけが残り，他集落の人々は去った。したがって，雨薬がはたしてどうなったのか，ウィアトゥオのモジョミジ階梯以外の人々にはさだかではない。

翌日（7月8日），モジョミジ階梯はアジュワ (Ajwa) に集まった。アジュワは，アゴーラよりさらに外側，集落から約1キロメートルのところに位置する。

この日集まったのは，モジョミジだけで，長老，若者，女・子供は参加しなかった。

アジュワでは，腰をおろしたニブルの背後でたき火がたかれた。モジョミジは「おまえはこの火で死ぬ」とニブルに告げた。それに対する彼女の返答は興味深い。

「よろしい。わたしは死ぬ。しかし，モロコシは問題なく実るだろう。もし，誰かがわたしにチエンを残したのなら，わたしの死後，それが誰かわかるだろう。もし，かんばつがジュオクの所業なら，それはしかたがない。わたし自身は，チエンを残したりはしない。」

そのとき，3人の男がニブルの前に進みでた。彼らは，いずれも身体に欠陥のある障害者だった。盲目の男は，ニブルの体に触れて言った。

「もし人々がリプルの丘を去ったら，誰がわたしを導いてくれるだろう。おまえが死んだら，われわれも死のう。」

小児麻痺を患ったらしい，下半身が不自由な男は次のように言った。

「人々がリプルの丘を去っても，わたしはいっしょに行くことができない。おまえが死んだら，われわれも死のう。」

最後に，癩病の男はこう言った。

「もし人々が村を捨てて，新しい場所に移っても，わたしは畑を耕すことができない。おまえが死んだら，われわれも死のう。」

これを聞いていたニブルは，何を思ったのか，立ちあがって逃げようとした。しかし，下半身の不自由な男の杖で打ちすえられ，3人の障害者によって火の中に放り込まれたのである。これによって，ニブルを死に至らしめた一連の暴力の幕が切って落とされた。

表2　1984年7月の日別降水量
（単位ミリメートル）

日付		日付		日付	
1	—	11	10.8	21	—
2	—	12	—	22	—
3	—	13	47.7	23	—
4	—	14	2.0	24	—
5	—	15	—	25	24.5
6	9.0	16	—	26	—
7	—	17	9.5	27	—
8	6.9	18	57.9	28	—
9	10.8	19	—	29	—
10	—	20	—	30	—
				31	7.9

（ラフォン R.D.C. での計測データによる）

ニブルは，火から脱出したところを，棒と笞で撲たれ，蹴りつけられ，再度火の中に放り込まれた。何とか火から逃れ出た彼女は，また撲られ，火に投げ入れられた。そうして，おそらく全身の火傷と打撲傷のため，ニブルはついにこときれてしまった。

ニブルの遺体は，モジョミジによって，アジュワから少し離れたブッシュの中に運ばれた。遺体はあおむけに地面に横たえられ，腹がたてに裂かれ，さらに胃が切り開かれた。それから，モジョミジは，ウチョック (*ucok*) と呼ばれるウリ（栽培種）をつぶし，それを胃の内容物，血と混ぜて，胃のなかに押し込んだ。また，ニブルの舌には，両側から木のとげが刺された。遺体はそのままブッシュの中に放置され，モジョミジは村にひきあげた。遺体は，ハゲタカとハイエナによって処理されたという。

村に引きあげたモジョミジは，村に入る手前で，山羊の胃の内容物，蟻塚の土を水と混ぜたもの，およびアカラジョ (*akalajo*) と呼ばれる野生のウリをつぶしたものを自分たちの体に塗った。

ニブルは，以上のようにモジョミジ階梯によって殺された。そして，彼女の死後，雨が降り始めた。R.D.C. のデータによれば，殺害のあった日には約 7 mm，翌 9 日と11日には約 10 mm の降雨があった。13日と18日には，それぞれ 50 mm 前後の大雨が降っている（表2）。これらの雨は旱天の慈雨となり，モロコシはようやく順調に成育しはじめた。

7月の降水量は 187 mm に達した。翌8月には 68 mm に落ちこんだが（表1），7月の雨でモロコシには十分であった。

ニブルの死後雨が降りだしたので，人々は雨を妨げていたのは彼女であることを，あらためて確信した。

2)　首長殺しに関する注釈

この年，私は8月4日に村に着いた。したがって，ニブル殺害事件の経過は，事後に聞き取りによって知ったものである。事実経過に関する情報を得るには，さほど困難はなかった。しかし，3度にわたる会議の主催者であり，殺害の責任者ともいえるウィアトゥオ集落のモジョミジから聞き取りをするのは，きわめて難しかった。そのため，当事者であるウィアトゥオのモジョミジ階梯が，各段階でどう問題を捉えていたか，ニブルに対する嫌疑・憎悪がいかに形成・強化されていったか，首長の殺害をどう考えているか，等々の問題を明らかにすることは，残念ながらできなかった。この点は，本論の記述の大きな限界である。

しかしながら，事実経過については，1985年5，6月に聞き取りを重ねることにより，かなり精度の高い記述ができたと考えている。

7月7，8日の出来事は，劇的で印象的である。けれども，このドラマを解釈するには，いくつかの注釈が必要と思われる。そこで次に，ニブルの遺体処理について注釈を加えたい。

なぜ，遺体の腹部を裂き，胃を切り開くという，一見すると残忍な行為がなされたのだろうか。第2章で述べたように，チエンの力の源泉は胃の中にあると考えられている。モジョミジは，胃を切り開くことによって，ニブルが残したかも知れないチエンの力を弱めようとしたのである。胃を開くと，チエンの力は，いわば，雲散霧消してしまうと考えられている。

殺される前に，ニブルは自分はチエンを残さないと明言している。しかし，モジョミジは彼女の言明を信用できなかったわけだ。舌にとげを刺したのも，チエンの効力を弱めるためと説明されている。

また，栽培種のウリが砕かれ，胃の中に押しこまれたのも，チエンの力を弱めるためである。この直径数センチメートルの球状をしたウリは，甘味がなく無味に近い。こうした無味のことを，パリはバス (*bath*) と呼ぶ。バスに対置される味覚の形容詞はケッチ (*kec*) である。ケッチは，苦味・辛味が度を越えていることを意味する。例えば，酒の味に用いられたばあいは，バスは水っぽいこと，ケッチはアルコール度が強いことを意味する。

ところが，この2つの形容詞は，単に味覚を表わすだけでなく，比喩的に様々な文脈で使われる。チエンについていえば，効力のある，つまり，大きな災厄をもたらす

チエンはケッチである。ジュオクの存在する場所は「ケッチな場所」と呼ばれる。また，勢力のある首長もケッチと形容される。そして，パリ自身の説明によれば，ウリのバス的属性が，チエンをバスなもの（効力のないもの）にする作用をもっている。喩えていえば，ウリの無味な果汁が，チエンの苦味・辛味を中和してしまうのである。

このようにみてくると，ニブルの遺体処理をめぐる行為は，いずれもチエンを弱めるための象徴的行為であることがわかる。

それでは，次に，遺体処理を終えたモジョミジが，村に入る前に山羊の胃の内容物，野生ウリの果汁，蟻塚の土等を身体に塗ったのはなぜだろうか。パリ自身は，これらの行為をミラ (*mira*) と呼ばれる観念と関連づけて説明する。

人間の血，とくに殺された者の血には，災厄をもたらす力がある。この力がミラである。流血の現場に居あわせた人々は，ミラに汚染されている。もし，そのまま村に戻り，人々と身体的に接触すると，彼らまでもミラに汚染されてしまう[22]。山羊の胃の内容物，ある種の野生ウリ (*akalajo*)，蟻塚の土は，ミラの力を弱める作用を持つとみなされている。この3種の一見すると全く異なる物質は，象徴的には等しい効用がある。ただし，野生ウリと蟻塚の土は，山羊が入手できないときに用いる，代替品的性格が強い。ちなみに，これが塗られる身体部位は，足の甲，膝，みぞおち，額，頭頂部である。

ところで，アカラジョのような野生ウリは，広くナイロート諸民族のあいだで，さまざまな相違はあるにせよ，共通した象徴的意味を担っていると考えられる。たとえば，ヌエルは供犠にさいして *kwol* と呼ばれるウリ (*Cucumis prophetarum*) を去勢牛の代替物として用いるし [エヴァンズ＝プリチャード　1982: 220–223, 317–318]，ディンカは *kuoljok*（ヌエルの *kwol* と同種）を病気の予防に胸，頭，背中に塗る。そして，*kuoljok* の属性は，パリのアカラジョと同じく *kec*（苦味・辛味を意味する）と考えられている [Lienhardt　1961: 209]。

8日に，ニブルに死に至る暴力が加えられる直前に登場する3人の障害者は，どのような役割を担っているのだろうか。彼らの登場の背後には，何か論理的必然があるのか。残念ながら，筆者は納得しうる解釈を示すことはできない。ここでは，一番最初に飢餓の影響を受ける最弱者が，飢餓の張本人に最初の一撃を加える権利を持っているのかもしれないと指摘するにとどめておく。

ところで，3人の障害者のいずれもが，「ニブルが死ねば，自分たちも死ぬ」と言っているのは興味深い。これは，7日にモジョミジが，「ニブルを殺して，われわれ

22）ミラに汚染された人は癩病になると考えられている。

はこの地から去る」と言ったのと対応している。いずれの発言も言葉のあやであって，ほんとうに村を放棄したり，自分も死のうと思ったりしていたわけではないだろう。

さて，ニブルの殺害を人々はどう捉えているのだろうか。私の知る限りでは，ニブルへの同情，およびモジョミジに対する非難の声は聞いたことがない。7，8日の両日においても，ニブルに対する暴力を止めようとした者は誰もいなかった。ただ，もし8日の場に長老たちが出席していれば，ニブルは殺されなかったかも知れないという意見はあった。長老は，意志決定・執行を遂行するモジョミジ階梯に対して，「異議申し立て人」的立場を担っているからである。たしかに，もしニブルが長老たちの中に逃げ込んで保護を求めていれば，モジョミジも手だしできなかったかもしれない。しかし，8日の場に長老が出かけなかったこと自体が，ニブルはもう死ぬしかないという彼らの意志の表われだったと説明されている。やはり，ニブルは，全員の合意のもとに殺されたといえる。

ニブルの死から1カ月半ほど経過した8月中旬には，村で次のような世論が形成されていた。人々にとって，ニブルが自分の死を予期しながら恐れなかったことは不可解だった。また，1982年のように，町へ逃亡するチャンスはあったのに，彼女は村にとどまった。これらの奇妙な事実は，ニブルがある男のチエンによって操られ，雨を降らせないよう，死を恐れないよう動かされていたためと説明されるようになった。このチエンの可能性は，先に述べたように，7月8日にニブル自身が示唆している。

ニブルがチエンに操られ，自らの意志を失っていたという説明は，彼女の行動を理解可能なものにすると同時に，人々が犯した殺人を合理化する役割をも果しているのではないだろうか。なぜなら，殺人の罪を，チエンを残した男に負わすことができるからである。

1984年のモロコシの出来高は，全体的にはまずまずだった。特に，プゲリ集落の一部，プチュワ，ブラ，ウィアトゥオ各集落の畑があるワーガ (Waaga) と呼ばれる東部地域の収穫は例年以上であった。しかし，プゲリの一部，およびコル，アングルメレ両集落の畑がある西部地域は，不作に悩まされることになった。所によっては，収穫ゼロという畑もあったほどである。不作の原因は，7月に入っても，西部地域にはあまり雨が降らなかったことである。

このように，モロコシの収穫は，東部と西部で鋭い対照をみせた。そして，西部地域の不作は，コル集落の首長マティア追放に至る一連の紛争を生じさせることになった。次節では，この紛争について述べる。

3)　コル集落のかんばつ

ニブルの死後降りはじめた雨は，ウィアトゥオの一部では多すぎて，畑が冠水してしまった。ウィアトゥオ集落のモジョミジは，大雨を降らせたのは，コル集落の首長マティアであるとして，彼を非難した。なぜなら，ニブルのいなくなった今，雨をコントロールできる力を持つのはマティアだけだったからである。第2章で述べたように，マティアは何種類かの雨石と雨薬を保持していた。

ウィアトゥオ集落のモジョミジは，もし雨を止めなければ，おまえを殺すか村から追放するといって，マティアを脅した。マティアは，何の弁明もせず沈黙をまもった。また，彼は脅されたことを，村の警察に報告した。そのうち，雨は止み，この問題は解決した。

その一方で，コル集落の畑にはニブルの死後も依然雨は降らず，かんばつが続いていた。コルのモジョミジは，マティアに会い次のように言った。「ニブルが死んだ今，雨に責任があるのはおまえだけだ。今回，おまえは雨を止めてウィアトゥオを助けた。今度は，われわれの畑に雨を降らせて欲しい。」この要望に対して，マティアは「頑張ってみよう」と答えた。

しかし，雨は降らなかった。モジョミジは，前年，雨を止めるために，あるアジュワの指示に従って，ドラム・ハウス[23]の床にカタツムリ（ウチョンボ *uconbo*）の殻を埋めたのを思い出した。1983年8，9月，コルの畑には大雨が降った。モロコシは，すでに結実期に入っていたので，もう雨の必要はなかった。そこで，モジョミジは，リキラ（Likila）という名のアジュワ（男性）に相談に行った。占師リキラは，カタツムリの殻をドラム・ハウスの床に埋めれば雨は止まるという託宣を下したのであった。

モジョミジは，前年埋めたカタツムリが雨を妨げているのではないかと疑った。それで，8月に，埋めた場所を掘りかえしてみた。しかし，カタツムリは発見できなかった。なぜだかわからないが，消えてしまったのである。

コル集落のモジョミジは，誰がカタツムリを掘り出したのかを考えはじめた。その男は，雨を妨げる意図を持っていたに違いなかった。すぐに，アベニ（Abeny）という名の，クワラ年齢組の長老に嫌疑が及んだ。彼は，この年の2月に死んだが，生前は毎晩カタツムリが埋められた場所のすぐ傍に寝ていた。また，彼はマティアの親友で，常にいっしょに飲み食いしていた。

アベニに対する疑いが高まるにつれて，マティアへの不信も増大した。その契機となったのは，アパナナ（Apanana）と呼ばれる雨薬の所在をめぐる問題である。アパ

23）ドラム・ハウス（*dwondi-bul*）は各集落の中央，広場に面した一画にある。そこは，ドラムが収納される場であり，長老とモジョミジの2階梯の gathering place（*kabore*）である。

ナナは，10年以上前に，当時モジョミジ階梯の頭であったキラン年齢組が，ロトゥホ族の雨の首長から得た雨薬である。これは，木片ではなく，パリ地域には棲息しないサイチョウ (hornbill) の剝製で，特に雨を止める力だけを持つと考えられている。雨を止める時には，くちばしを雨の降る方向に向けて置くのだという。

アパナナは，他の雨薬と共に，マティアが所持していた。ウチョンボの行方が問題になったとき，モジョミジは，アパナナはどうなったのかと思い当った。そしてマティアに尋ねたところ，彼は，「アパナナは紛失してしまった。私の手もとにはない。」と答えたのである。それ以来，モジョミジの間で，マティアはアパナナを用いて雨が降らないようにしているのではないかという疑惑が芽生えてきた。

4)　占師ウイエン

マティアとアベニに対する嫌疑が高まり，依然として雨が降らなかった，8月中旬から下旬にかけて，興味深い事件が生じた。事件の主人公は，ウイエン (Wiyen) という名のアジュワ（男性）である。

8月のある日，占師ウイエンはコル集落のモジョミジのところへやって来た。そして，雨を妨げているのはマティアであると非難した。彼によれば，マティアはこっそり彼を訪れて，雨を妨げる力をもつ呪物を与えられた。マティアは，それをコルの畑の某所に埋めた。

モジョミジは，事の真偽を確かめるためマティアに尋ねたが，彼はウイエンとのかかわりを全面的に否定した。マティアは，「コルの首長である私が，なぜコルの雨を妨げることがあろうか」と言って弁明した。

ウイエンは，「それなら私が呪物を埋めた場所を探し出しましょう」と申し出た。もちろん，彼はその場所を知らないが，呪物の嗅いでかぎだすことができると主張した。

そこで，モジョミジは，雄羊1頭を連れて，ウイエンと出かけた。畑のある場所まで来ると，ウイエンは羊を殺すよう命じた。彼は，胃の内容物を地面に盛り，傍で火をたいた。そして，ナイフで地面を掘り始めた。何かを掘りあてたとき，ウイエンは，「気を失ってしまう。おれを捕まえてくれ。捕まえてくれ。」と叫びながら，うしろへあおむけに倒れてしまった。居あわせたモジョミジは，彼の大げさな身ぶりと言葉に，神妙な気持ちになるどころか，大笑いしてしまったという。

倒れたウイエンは，半ば無意識に，羊の胃の内容物を頭に塗るよう頼んだ。それがすむと，彼は意識を取り戻し，起きあがった。モジョミジはまだ笑い続けていた。彼は，地面から掘り出した，布の小さな包みを人々に示し，切り開いた。中味は，犬の糞とモロコシの穀粒だった。ウイエンは言った。「これこそ，私がマティアに与えた

ものである。」

それから，彼らは村へ戻ったが，村の外側にある水たまりのほとりで，ウイエンは立ちどまり，布の包みの中身を水の中に捨てた。そして，「これで雨は降るだろう」と言った。

ウイエンに対する哄笑から明らかなように，モジョミジは彼の言葉を信じたわけではない。彼らは，ウイエンが発見した布の包みは，マティアではなくウイエン自身が埋めたものだと考えた。要するに，彼はトリックを用いたのである。しかし，畑で屠殺された雄羊と現金30ポンドがウイエンに与えられた。

モジョミジとウイエンが畑に行ったその晩，少しだがほんとうに雨が降った。それで，人々のなかには，「ウイエンはトリックを用いたのは確かだが，しかし，ジュオクから何らかの助けを得ているのかもしれない」と思い始める者がでてきたのである。

この後，ウイエンは，モジョミジを伴って，マティアが埋めた呪物を掘りだすことを，さらに2度くり返した。そのたびに，雄羊が殺され，彼に与えられた。

それから，ウイエンは，もし私が行水をしたなら，雨が降るだろうと人々に告げた。そして，じっさいに2，3度，彼の行水の後に雨がぱらついたのである。この頃になると，彼の名声は高まり，彼はほんとうに雨を降らす力を持っていると考える人々も多くなった。彼を「雨の首長」と呼ぶ人もいたほどである。

そして，コルと同様かんばつに苦しんでいたアングルメレ集落のモジョミジは，ウイエンに多額の贈り物をして，雨を降らしてくれるよう頼んだ。贈り物の内容は，ワラギ（蒸溜酒）5びん，現金70ポンド，雄山羊1頭であった。しかし，この頃から再び雨は降らなくなってしまった。

コル集落のモジョミジは，ウイエンを召喚した。両者の間で次のようなやりとりがあった。

モジョミジ：われわれは，今までおまえに多くのものを与えてきた。どうして雨を降らさないのか。

ウイエン：わたしは努力している。しかし，できないのだ。

モジョミジ：それでは，どうしてこの間は雨が降ったのだ。

ウイエン：あの時は，ジュオクが私を助けてくれた。だが，今ジュオクの助けはない。

モジョミジ：いや，いや。もう一度頑張ってみろ。

モジョミジは，さらに羊1頭と現金をウイエンに与えた。その羊は屠殺され，胃の内容物が畑にまかれた。しかし，その後も雨は降らなかった。そして，コル集落のモ

ジョミジ階梯は，とうとう彼の追放を決定した。

8月25日，モジョミジはウイエンを捕えた。彼の身の回り品や生活用品は破壊され，彼が首や腕につけていたお守りはむしり取って川に捨てられた。それから，ウイエンは，村の入り口にある，乗り合いトラックの発着所まで連れて行かれた。もし，モジョミジがある人の追放を決定すれば，その人はすべての財産を放棄して，身ひとつでその日のうちに村を出なければならない。情状酌量の余地は全くない。8月25日には，ちょうどトリット行きのトラックがあったが，ウイエンは乗車賃を持ちあわせていなかった。それで，彼は徒歩で村を去った。こうして，8月中，コル集落の人々を巻き込んだウイエンの一件は，その幕を閉じたのである。

ウイエンは，ごく短期間ではあるが，雨をコントロールできる男としての名声と権威を享受することができた。彼は多額の現金と山羊・羊を得た。彼は，一時期ミニチュア版の雨の首長であったといえるかもしれない。

しかし，先に述べたように，彼は最初，ある種のうさん臭い男として眺められていた。雨に関する予言が成就して，はじめて彼に対する評価は変化しはじめたのである。そして，雨を降らせる力が失われたとき，ウイエンの評価はたちまち地に墜ち，村からの追放という，厳しい処分が待ちうけていた。

ウイエンの事例は，パリにおける雨の問題を考える上で，きわめて示唆に富んでいる。私には，この事例が，人々の雨の首長に対する態度の雛型を明らかにしているように思える。そこでは，人々は降雨の原因・過程よりむしろ結果に関心があった。この点については，次章で検討を加える。

5)　コル集落首長マティアの追放

ここで，話を再びマティアの問題に戻す。ウイエンが人々の関心を集めている間は，マティアの問題はなおざりにされていた。しかし，彼の追放後，モジョミジはカタツムリとアパナナの行方とマティアの責任に関心を集中するようになった。

コル集落のモジョミジは，まず，前年カタツムリを埋めるよう指示したアジュワ，リキラのもとへ相談に行った。リキラは，雨を降らすには，黒ニワトリの翼を吊るせばよいとの託宣を下した。モジョミジは指示に従ったが，雨は降らなかった。

次にモジョミジは，別のアジュワ，リラル (Lilar) という男を訪ねた。彼は，カタツムリの殻はマティアが所持しているが，誰かのもとに隠しているのだという託宣を下した。モジョミジは，それは誰かと尋ねた。リラルは，最近死んだ者の中に心あたりはないかと聞いた。モジョミジがアベニの名前をあげると，リラルは，カタツムリはこの男のもとに隠されていると判定したのである。この託宣によって，モジョミジ

が，マティアとアベニに対して抱いていた嫌疑は，確固としたものになった。

また，モジョミジがアジュワに会う以前に，アベニが雨が降らないようチエンを残していたという世論が，すでに形成されていたことも指摘しておかねばならない。その内容は次のとおりである。

アベニには，娘が1人だけで息子はなかった。そのため，息子のある父親たちには嫉妬を抱いていた。また，同じ年齢組の仲間より自分が先に死ぬことに憤懣の念を感じていた。彼は死の床に，父方血族ペトロニア (Petoronia) と親友のマティアを呼びよせた[24]。そして，自分の家と財産はペトロニアが相続するように告げた。マティアには，招福の力をもつ呪物ダウ (*daw*)[25] を与え，彼だけはジュオクの加護をうけて繁栄するが，他のコル集落の人々は滅びるようにというチエンを残したといわれている。

9月12日の夜，モジョミジは，翌朝アベニの墓を暴くことを決定した。アベニの遺産を相続したペトロニアのもとへは使者が派遣され，明朝は外出せず家にいるよう，牛1頭をモジョミジに供出するように命じた。しかし，ペトロニアは「たとえコルの牛がすべて私のものであっても，私は1頭の牛も差し出さない」と返答した。また，アベニと近縁の血族，ディノ (Dino) とリンガ (Liŋa) の2人にも使者が遣わされ，明朝は家にいるように告げた。

9月13日，朝6時頃，モジョミジとマティアは，アベニの墓に向った。まず，栽培種のウリがつぶされ，墓の上にまかれた。これは，以前述べたように，チエンの力を弱めるためである。それから，墓の発掘が始まる。最初のひと掘りは，マティアが行なった。遺体が見えてくると，雄羊が屠殺されて，人々は胃の内容物を遺体にふりまくと同時に，自分たちの身体にも塗った。野生ウリ・アカラジョもつぶされ，羊の胃の内容物と同様に使われた。そして，遺体を墓穴から取り出す前に，アベニの近縁の血族が，遺体の頭部を漁槍で突き刺した。これは，チエンがモジョミジにではなく，その男に向かうようにするためと説明されている。

掘り出した遺体は，牛皮に包んでマティアがひとりで背負った。これは，アベニとの共謀に対する罰であった[26]。遺体は川の対岸の河辺林に遺棄された。戻ってきたモジョミジは，コル集落の外側に集合し，8時半頃から会議が始った。

私は，会議の場に居あわせて，一部始終を観察することができた。コル集落から徒歩約10分の草地に，モジョミジと長老は別々に坐った。長老階梯は，キラン年齢組と

24) ちなみに，マティアにも娘だけで息子はいない。
25) ダウとは，芯の部分が中空になった，ある種の木の枝である。中空であるために軽い。「軽い」(*yoot*) ことは，人間にとっても，家畜にとっても望ましい状態である。
26) モジョミジは，アベニの墓の中に，カタツムリが埋められていると予想していた。しかし，カタツムリは発見できなかった。

クワラ・ウクエル年齢組に別れて坐った。出席者は，モジョミジ40名，長老60名，全部で約100名を数えた。

会議が始まる前に，ペトロニアとマティアから没収された雄牛と不妊の雌牛とが，槍で心臓をひと突きにして殺された。その場で牛の解体がはじまった。

会議は午前9時15分から1時間余にわたり，60数名が発言した。議論は白熱し，激しい口論がたびたび交わされた。会議の焦点を整理すれば以下のようになろう。

第1の焦点は，アベニの近縁者3名の査問であった。ペトロニア，ディノ，リンガの3人は，前夜モジョミジから外出しないよう通告をうけたにもかかわらず，朝から畑に行ってしまった。そこで，若者階梯の最年長であるマダン年齢組の若者たちが，彼らを連行するため派遣された。若者たちは，3人の男たちを笞で追いたてながら戻ってきた。3人の男は，背中をしこたま打たれ，会議の場に着くと，クワラ・ウクエル年齢組の間に飛び込んだ。長老たちは，さらに笞うとうとする若者を制止した。3人は，モジョミジとキラン年齢組の間に坐った。

モジョミジは3人それぞれに，アベニとの関係を尋ねた。ペトロニアは，問答の末に，アベニの遺産を相続したことを認めた。長老から，ペトロニアが相続したアベニの遺産はすべて破壊されるべきであるという意見がでた。しかし，けっきょく，モジョミジは遺産には手を下さないことに決定した。ペトロニアは，雄牛を1頭没収されただけで，それ以上の追求をまぬがれた。

査問が終わると，3人の男は自分の年齢組（全員アニュワ）の場所へ戻ることを許された。その後，議論の焦点はマティアに移った。

マティアは最初，長老たちと坐っていた（彼自身はキラン年齢組に属する）。しかし，モジョミジは，マティアもアベニの血縁者3名といっしょに坐るように要求した。それで彼は場所を移ったのである。

この日のマティアは，まるで被告席に坐った犯罪者のようだった。首長の威厳など，どこにも見あたらなかった。彼は，しじゅう首をうなだれてびくびくしていた。同様に，ペトロニアら3人の表情も恐怖でひきつっていた。特にリンガは，手は震え，口はどもって，満足に話すことすらできず，出席者の失笑をかった。

モジョミジと長老は，カタツムリとアパナナ，および他の雨薬がいったいどこにあるのかマティアに質問した。彼は，カタツムリとアパナナは紛失したと答えた。そして，「雨を降らそうと努力してきたが成功しなかった。もう1度頑張ってみる。」と弁明した。モジョミジからは，マティアが現在所持している雨薬をすべて没収すべきであるという意見が出された。しかし，この意見は斥けられ，マティアにもう1度やら

せてみることになった。彼には，2日間の時間が与えられた。そしてモジョミジは，もし2日のうちに雨が降らないなら，ただちに村から追放するとマティアに宣告したのである。

会議の途中で，モジョミジと長老の2階梯間で激しいやりとりが交わされ，激昂した男たちが立ち上がり，まわりに取りおさえられる場面が何度かあった。

例えば，モジョミジは，キラン年齢組の中に，マティアが雨薬を隠すのを手伝っている者がいると非難した。キランはこの主張を強く否定した。また，このやりとりは，モジョミジとマティアの関係が疎遠であるのに対して，キランとマティアはより親密である事実を示唆したものとしても興味深い。

午前10時25分，会議は終了した。わずか2日のうちに雨が降らないと，マティアは村から追放されることになった。私はマティアのもとへ行き，言葉を交わした。彼は，「ジュオクは偉大である (*jwok dwoŋ*)」と言った。この文句は，様々な文脈で，様々な意味をこめて用いられるが，この場合は「何事もジュオクしだいである」といった意味あいだったように思う。

会議終了後，屠殺された2頭の牛の肉は，年齢組単位に一定のルールに基づいて分配された。肉はその場で焼いて食べる。

牛とは別に，モジョミジは1頭の雄羊を畑まで連れて行った。そこで生きたまま腹を裂き，胃の内容物を取り出し，それを水とまぜて四方にふりまいた。これは，雨を降らすための行為であると説明されている。その後，羊は解体され，肉はその場で焼いて，近くに居あわせた長老と羊を運んだ男たちが食べた。

会議の翌日，翌々日も雨は降らなかった。そして，9月16日，マティアは村を追われ，トリットに向った。彼は，まさに着の身着のままで，すべての財産を村に残して追放されたのであった。トリットでは，町に住んでいる親族のもとに身を寄せた。

1984年，コルの畑ではモロコシの出来具合は，雨不足のためたいへん悪かった。数10センチメートルの高さで，モロコシが立ち枯れてしまった畑も多かった。また，2期作目の収穫も望むべくもなかった。マティアは，その責任を負わされて，村を追放されたのである。

こうして，1984年9月の時点では，パリ社会できわめて重要な社会的役割を担っているコルとウィアトゥオ集落の首長が，いずれも空位のままになってしまった。さらに，行政首長の職も，先任者が税金の使い込みのため更迭されて以来，空席であった。つまり，雨の問題だけでなく，より一般的な問題について，政治的リーダーシップを発揮しうる人物は存在しなくなったのである。

5.　1985年：雨の首長不在，各集落の対応

1)　ウィアトゥオ集落

1984年11月末，私は村を去った。そして翌1985年5月に再び村入りし，6月下旬まで滞在した。雨の首長，およびコル集落の首長も不在の状況に，モジョミジがどう対処していくのか，私には関心があった。

パリの人々は，雨をコントロールしうる人が存在しない状況を，「われわれはジュオクの手の中にある」と形容する。雨季が近づいても，モジョミジはわが身をジュオクに委ねたままで，何の対応策もとらなかった。

この年，雨は例年より早く，3月に降りはじめた。そして，3月末から4月初めにかけて，各集落は別々にモロコシの播種を行なった。

4月，雨は順調に降り続いたが，5月に入ると止まってしまった。そして，特にプゲリ，コル，アングルメレ集落の畑に，雨不足の影響がではじめた。

5月末，かんばつの原因を知るため，ウィアトゥオ集落のモジョミジは，あるアジュワ（女性）のもとへ赴いた。彼女は，雨を妨げているのはブラとコルの両集落である，彼らが畑に呪物を埋めたため，雨が降らないのだと判定した。

そこで，この問題を究明するため，ウィアトゥオ集落のモジョミジは全モジョミジを召集し，5月31日，アゴーラ（前年7月にニブルの件で会議が開かれた場所）で会議を開いた。

この会議において，ウィアトゥオは公然とブラ・コル両集落を非難し，次のように述べた。「われわれは，おまえたちが何か（呪物）を畑に埋めたことを知っている。それらをすぐに掘り出すように。」

コルは次のように反論した。「われわれは皆，同じパリである。パリを苦しめるために，雨を止めるなどできない。去年，われわれのモロコシは不作だった。どうして，今年もそれを繰り返すことができよう。」

ブラ集落も同様の反論をし，さらに重ねて言った。「ウィアトゥオよ，もしおまえたちが，われわれが何かを埋めたと主張するなら，いっしょにそれを掘り出しに行こう。」ウィアトゥオ集落のモジョミジは，「われわれは，アジュワに告げられただけで，埋められた場所を知っているわけではない。」と答えた。

議論は平行線をたどり，長老たちが次のようにとりなして，会議はいちおう終了した。「いまや，われわれには雨の首長はいない。われわれの口をひとつにして，雨が降るようにしようではないか。」「口をひとつにする」(*ripo dhok acielo*) とは，パリ内部で争いのない状態を指す。内部で争いがあると，ジュオクの助けが得られず，雨は

降らないと考えられている。

この会議後，ウィアトゥオ，コル，プゲリの3集落は，かんばつの原因をつきとめ，雨を降らすために，それぞれ独自の動きをみせる。これは，雨の首長という中心的な権威が存在しないことの必然的結果と考えられる。

まず，ウィアトゥオのモジョミジ階梯は，雨を妨げている犯人について，さらに正確な情報を得るため，ジュバの町の有名なアジュワ（占師）のもとへ2人の代表を派遣した。このアジュワは，スーダン人ではなく，ナイジェリアのファラタ (Falata) という民族出身の男だといわれている。ファラタとは西アフリカの牧畜民フラニのアラビア語名である。

ファラタのアジュワは，報酬として400ポンドを要求した。モジョミジの代表は，とりあえず持ちあわせの200ポンドを支払った。アジュワは，2種類の粉と2種類の木片を与えて言った。「村に戻ると，白い雄羊を探せ。そして，薪を集めて火をたき，雄羊と，粉と木片を灰になるまで燃やしなさい。そうすれば雨が降る。」それから，もし残りの200ポンドを支払えば，雨を妨げている犯人の名前を教えてやると言ったという。しかし，モジョミジの代表は，現金不足のため，犯人の名前を聞きだすことはできなかった。

2)　コル集落

一方，コルのモジョミジ階梯は，ロトゥホ族の村ロキリ (Lokiri) の雨の首長，リコリ (Likori) をパリに招くことを決定した。リコリは，強力な雨の首長として知られている。雄牛1頭，雌牛1頭現金100ポンドが贈られ，リコリはパリに来ることに同意した。

6月初旬，リコリは自分の雨薬を携えて来村し，雨を降らすための儀礼を何度か行った。まず，彼は村に着くと，灰色の雄羊を連れてくるよう命じた。羊は屠殺され，リコリは内臓を調べた[27]。胃は問題なかった。次に，彼は肺を取り出し息を吹き込んだ。彼によると，肺のある部分は良く，他の部分は悪かった。彼は良い部分は豊かな収穫を，悪い部分は飢餓を表わしていると言った。肺の悪い部分は，栽培種のウリ (*ucok*) と結びつけて棄てられた。それから，羊の胃の内容物，水，野生ウリ (*akalajo*) および呪物を混ぜたものを小さな壺に入れ，畑に運び，口だけだして畑に埋めた。

次に，リコリは，モジョミジに陸亀 (*kitabok* or *moru*) を捕えてくるよう命じた。捕えられた陸亀の甲羅には穴をあけ，畑につくった小さな柵の中に入れた。この柵は，先日埋めた壺のすぐ傍に作られた。リコリは，畑まで出向いて，陸亀に水をかけた。

27) パリでは，雨の首長も，アジュワも，こうした内臓占いを行なわない。

やがて大雨が降り，雨が止むと，亀はどこかへ逃げてしまっていた。

異部族の男リコリが遂行したこれらの儀礼の目的を，コルの人々は，雨を降らすためと理解していた。しかし，その各過程と象徴の持つ意味，例えば，なぜ陸亀が使われるのか，は解らなかったようである。

また，リコリは雨薬として，指ほどの大きさで，キャッサバの茎のような赤い色をした木片をふたつ持っていたが，その使用法は次のとおりである。雨薬をまずゴマ油に漬け，次に水，山羊の胃の内容物，野生ウリを砕いたものを混ぜた液体に漬ける。そうすると，木片の断面から泡が出てくる。この泡は，雨の象徴と考えられている。それから，リコリは雨が降るまで頭をうなだれて家の中に坐り続ける。もし，外に出ると雨雲が四散してしまい雨は降らないという。彼は，以上の行為を，何度か繰り返した。

リコリの滞在中，コル集落の畑には大量の雨が降り，雨の首長としての彼の仕事は成功であったとみなされている。村に招かれる時，彼は2頭の牛と100ポンドを贈られたが，村に滞在中も，毎日2斗のモロコシビールが与えられた。さらに，それとは別に，長老，モジョミジ，若者階梯の各年齢組は，現金10ポンドとビール1斗を贈ったという。

リコリは，6月17日，パリを去り自分の村に帰った。

3)　プゲリ集落

プゲリ集落のモジョミジは，6月初旬，トリットの町から，イコイ (Ikoi) という名の女アジュワ（占師）を呼びよせることにし，4名の代表を派遣した。イコイは，ロトゥホ族出身の有名なアジュワでウィアトゥオ集落のモジョミジの招きによって，1度パリに滞在した経験もある。

イコイ招聘のため，プゲリ集落のモジョミジは，雄牛1頭と雌牛1頭を用意した。6月13日，イコイは息子と姉（同じくアジュワである）を伴って来村した。

イコイの一行は，モジョミジの主だったメンバーの家に落ちついた。イコイは，雄羊を連れてくるように命じた。

連れてこられた雄羊は，イコイの目前で3たび放尿した。彼女は地面にしみこんだ尿を手につけ，自分の頭に置き，姉に放尿の意味を問うた。姉は，「3度は良い知らせ。もし，2回放尿したなら悪い知らせ。」と答えた。その場には，モジョミジの代表4名が同席していた。羊は，彼らによって窒息死させられた。イコイは，ナイフで羊の腹を裂き，内臓を調べはじめた。

イコイは，肺，心臓，肝臓，腸を念入りに調べた。特に異常はなかった。腸間膜の

血管を見て，「十分な雨が降るべきである。」と言った。次いで，肝臓付近の膜に水が溜っているのを指さし，「降るべき雨が妨げられている。」と言った。さらに，肝臓の表面の白斑，腸間膜の指先大の白粒を指し示し，雨が妨げられているしるしであると言った。

それから，イコイが羊の胃を切開すると，皮の切れはしが7個と，長さ10数センチの紐が出てきた。皮の塊は，とても羊が飲み下したとは思えない大きなもので，それを見た4人のモジョミジは，息をのんだ。ここで，イコイの態度は一変し，攻撃的になる。

「これは，モジョミジがわたしを殺そうとしているしるしである。今日すぐトリットに戻り，おまえたちを非難してやる。」彼女は，ナイフで内臓，胃の内容物をたたきながら，興奮して声高にしゃべる。血や体液が，四方に飛び散る。モジョミジたちは，ただおし黙っている。イコイは彼らに，すぐここから出ていくように命じた。

雄羊の胃から発見された皮の塊は，プゲリのモジョミジに大きな衝撃を与えた。私には，イコイの攻撃性の表出が，モジョミジとの関係において自分が主導権をとるための演技のように思われた。

イコイが到着した日の午後から降りはじめた雨は，夜に入って豪雨となり，14日の朝まで降り続いた。そして，16日には，イコイはかんばつの原因を究明し除去するための儀礼をとり行なった。この日は，朝から雨だった。

早朝5時半，イコイと姉はプゲリ集落の広場に赴き，その中央に坐った。数10人の長老，モジョミジ，若者が彼女たちを取り巻いた。

イコイは，空のヒョウタンの器[28]を手でカタカタたたきながら振った。それから，器の中から小さな布の包みを取り出し人々に示した。「これは，畑に埋められたものである。ある老女が死んだとき，彼女はこの包みをある男に，パイプを別の男に与え，プゲリに雨が降らぬよう埋めるように命じたのである。」とイコイは言った。

空の容器から現われた布包みは，プゲリの人々をおどろかせた。イコイは，モジョミジに対して新たな要求をつきつけた。「わたしは，山羊10頭と現金100ポンドが欲しい。さもないと，トリットに戻る。雨を妨げている呪物は他にもある。もし，わたしの要求に応えてくれたら，それらを見つけ出してやろう。仕事を始める前に，要求したものをすべて，ここに持ってきて欲しい。」

要求をうけたモジョミジは，広場の傍で数分間話し合い，結局要求をのむことにした。急いで現金が集められた。

28) ヒョウタンの容器は，南部スーダン一帯で占い師・呪医が診断・治療のために広く用いる。

現金100ポンドがイコイに手渡され，彼女は再び仕事にとりかかった。黒羊が連れてこられた。羊は放尿し，イコイはそれを手でうけて，自分の額，頭頂に塗った。それから，羊は腹を裂いて屠殺され，内臓がとり出された。内臓の検査が終ると，イコイは次のような演説をした。

「チエンを残した人々は死ね。そして，雨よ降れ。羊は放尿せよ，そして雨よ降れ。見つかった布包みによって，おまえたちは呪われていた。しかし，もう大丈夫だ。ジュオクはすべてを知っている。わたしは，モジョミジの求めに応じて，人々を助けにきた。今や，わたしはおまえたちの母のようなものだ。今度パリに来たときは，ヒョウタン1杯のモロコシで十分である。それでよろこんで仕事をしよう。」もちろん，これは数分にわたる演説の要旨でしかない。この演説をもって，この日の儀礼は終了した。

イコイの到着以来，雨が降り出したので，プゲリのモジョミジは彼女の能力を認めていた。結局，彼女は最初に贈られた牛2頭に加えて，山羊10頭，現金100ポンド，そしてさらにモロコシ2袋（約180キログラム）という多額の報酬を得たのである。私には，モジョミジに対して主導権を握り，できる限り利益をひき出していくイコイの手練手管が印象深かった。

4)　集落間の緊張緩和

さて，ジュバのアジュワのもとに派遣されたウィアトゥオ集落の代表は，いかなる報告を村に持ち帰ったのだろうか。先に述べたように，彼らの目的は，雨を妨げている特定の個人あるいは集落を同定することであった。そして，同定された人々は，ウィアトゥオ集落のモジョミジから告発され，暴力による制裁を受けることは必至だったので，村人たちは固唾を呑んで結果を待ちかねていた。

ところで，ウィアトゥオのモジョミジは，現金不足のため，アジュワから犯人の名前を聞きだせなかった。2名の代表は，6月13日，イコイが到着したのと同じ日に村に戻った。代表はアジュワの指示を伝え，それに従って白い雄羊を焼却した。そして，この日から，プゲリと同様にウィアトゥオ集落の畑にも雨が降りはじめたのである。

しかし，ウィアトゥオ以外の集落では，興味深いことに，アジュワは雨を妨げた犯人としてウィアトゥオ内部の5名の名を告げたという噂が，まことしやかに広がっていた。人によって多少の異同はあったが，雨の首長ピデレの父ウンガンの妻を含む5名のじっさいの名前まで語られていた。噂の語り手，聞き手たちは，もし犯人がウィアトゥオ以外の者だったら，きっとウィアトゥオに殺されていただろう。しかし，自分の集落のメンバーを5名も殺すことはできないので，犯人には手を出さないでいる

と信じていた。また，5名の犯人は，告発後畑に埋めていた呪物を掘り出した。そのため，13日以降雨が降りはじめたと理解している人々もいた。

このような，客観的事実からかけ離れた，しかし何らかの根拠はある噂が流布され，いく通りもの主観的事実が形成されていく過程は興味深い。主観的事実も当事者の人々にとってはきわめて現実的なものである。

以上のように5月31日の会議で表面化した集落間の緊張は，6月中旬以降，全集落にまんべんなく雨が降ったため，深刻な紛争に展開することなく解消した。

雨の首長が不在の状況のもとで，雨を降らすために，各集落が独自の動きをみせたことが，1985年の特徴のひとつである。今や，6集落全部が，それぞれの雨薬を保持しているといわれている。

この点に関して，指導的な地位にあるウィアトゥオ集落のモジョミジに意見を求めたことがある。彼は，「雨の首長がいない以上，各集落がパリに雨をもたらすために努力するのはいいことである。もし，ブラが失敗しても，コルは成功するかもしれない。」と答えた。確かに，この考えも納得しうるが，その一方で，各集落は必ずしもパリ全体の安寧と豊饒のために奮闘しているのではないのも事実である。つまり，各集落が雨薬を保持し，それらを統制する中心的な権威を欠く現在の状況は，集落間の葛藤・奮闘が発展する可能性をつねにかかえているといえる。

以上の潜在的に不安定な状況は，おそらく数年後，ピデレの一人息子が雨の首長としてパリに戻ってくるまで続くと思われる。

Ⅳ．討　　論

1.　降雨の因果論における結果の重視

紛争の記述を通じて，パリにおいては，降雨は単なる自然現象ではなく，固有の降雨の因果論によって解釈されることにより，社会的な問題となることを明らかにしえたと考える。第二章では，この因果論の特徴として，その多元性と妥当性が結果論的に検証されることの2点をあげた。ここでは，これらの点をさらに論じてみたい。

パリの人々は，なぜ雨の首長が雨をコントロールできるのか，またどうして雨薬が効力を発揮するのかについてはあまり関心がない。むしろ，雨の首長や雨薬がじっさいに雨をコントロールできるのかどうかに重大な関心を寄せている。つまり，彼らにとっては，作用の過程より，結果が重要なのである。こうした「結果第一主義」は，これまでみてきた様々な出来事によく現れている。

例えば，アチョリ族の雨の首長，ルドルフォは，雨を降らせるために来村したが，降らせすぎたために，すぐに村を追放されてしまった。また，コル集落のアジュワ，ウイエンは，当初人々から疑いの目で見られながらも，何度か力を発揮し，良い結果をもたらしたために，小さな雨の首長たりえた。しかし，その力が失われるやいなや，ただちに追放されたのである。

また逆に，1985年，コル集落に招かれたリコリのように，失敗することなく良い結果に恵まれたままで，多額の報酬を得て，仕事を終える場合もある。雨の首長ニブルに対する人々の態度も，こうした結果第一主義に裏打ちされている。いったん雨の首長としての能力にかげりが生じると，モジョミジの対応は厳しくなる。彼らは毎年多量の財とサーヴィスを提供し，その見返りに首長が良い結果をもたらすことを期待している。この期待が裏切られると，雨の首長はもはや首長ではなくなるのである。

ただし，他の専門家と比べると，雨の首長に対しては，結果第一主義の適用が寛大であることを忘れてはならない。つまり，ニブルのばあい，長期間にわたって失敗を続けても，チャンスはくり返し与えられたわけである。このことから，雨をコントロールする力を備えた専門家が複数いるなかでも，やはり雨の首長が特別の地位を占めていることがうかがえる。

ところで，こうした結果重視の姿勢は，かんばつや大雨がモロコシの成育に影響を与えるようになってはじめて，その原因が追求されるという特性，つまり災厄が訪れてはじめて災因が事後的に検討されるという特性とも通じている。この点はケニヤのメル (Meru) 社会における雨乞い儀礼の過程と共通しており興味深い [加藤　1984: 70–74]。

2.　政治的操作の媒体としての雨薬

さて，結果第一主義においては，効きめの強い雨薬への関心が非常に高いため，その所在が政治的問題となることが多い。ニブルとマティアをめぐる紛争のなかで，雨薬がはたして彼女（彼）の手もとにあるかどうかが，問題の焦点であったことはすでに見た。

もともと，その本来の性質からして，雨薬はきわめてあいまいな存在である。ごく少数の人しかじっさいに目にしたことはなく，ほとんどの人は，それがなぜ雨をコントロールできるのかを知らない。また，雨薬のすべてが，アチョリやロトゥホといったパリの「外」から招来されたものであることも注意しておいてよい。そして，不思議なことに雨薬は，しばしば所在が不明になったり紛失したりする。

こうした雨薬の秘密性，あいまい性こそが，雨薬をすぐれて政治的な存在たらしめていると思われる。つまり，雨をめぐる政治劇において，雨薬は当事者双方にとって，さまざまな場面でさまざまな目的に用いることのできる，操作可能性の高い小道具，あるいはそれ以上のもの，と考えられる。

そこで次に，雨に関する紛争の政治的側面について検討する。

3.　告発の社会的背景

モジョミジ階梯は，つねに雨の不順の原因を追求しているが，この営みは，結果として，不順をもたらした原因と思われる人の告発をもたらす。告発される人は，生者の場合（雨の首長と雨薬を所持する人）と死者の場合（チエンを残した人）との2種類がある。しかし，いずれの場合も，告発の背景には，モジョミジと被告発人との間に何らかの社会的葛藤があるという点で共通している。

チエンを残したかどで告発されるのは，生前何らかの不幸を背負っていたため，他人に対する憎悪や嫉妬を抱いて死んだ人が多い。一般に，子宝に恵まれなかったり，親類・友人から冷たくあしらわれたりして孤独な人生を送った人は，チエンを残すと考えられている。

第二章で述べたように，パリの人々は他人の「死の状況」に高い関心を抱いている。死の床にある病人が，生前の社会関係の総決算として，グエス（祝福）とチエンのいずれを言い残したのか，病人と自分とがどういう関係にあるのかが，常に話題になる。こうしたチエンの観念は，パリが自らの社会関係にたいへん気をつかい，敏感であることと密接に関連している[29]。

すでに死んでこの世には存在しない者を告発するチエンの場合と異なり，生者の告発は，モジョミジと被告発人とのその後の関係に深刻な影響を与える。なぜなら，告発は被告発人に対する公然の暴力，追放，最終的には殺害を招くことになるからである。ここで指摘しておきたいのは，被告発人はすでに告発される以前から常に何らかの社会的葛藤を他者と経験しているという点である。告発は，その葛藤が衆目のもとにさらされる契機であるにすぎない。

例えば，アニャラの場合をみてみよう。まず第一に，ウィアトゥオ集落のモジョミジは，彼が自分の雨薬を用いて雨の首長になる野心を抱いていたと非難している。アニャラの告発は，首長の座をめぐる首長直系と傍系の間の，3世代にわたる権力闘争

29) Lienhardtは，アニュアクとディンカ-ヌエルを比較して，前者は人間に，後者は牛に関心を抱いていると論じた [Lienhardt 1962: 75]。この意味では，パリはアニュアクに近い。

の表面化という側面を持つ（図5参照）。ただし，私がアニャラ自身にインタヴューしたところによると，彼自身は首長になる野心も，さらに雨薬所持の事実さえも完全に否定している。

第二に，告発の背後には，アニャラの富と成功に対する人々の嫉妬があると考えられる。アニャラは，勤勉で成功した農夫兼商人であった。彼の畑は誰よりも広く，多くのモロコシを産出し，また彼は，ウィアトゥオに商店を構えて，小売業と村と町の間の交易とを営んでいた。村に数軒ある商店のほとんどは，外部者によって経営されており，市場経済の浸透度が低いパリのなかでは，アニャラのような「商才」に恵まれた男はきわめて例外的であった。彼の住居兼商店も，四角い屋敷地にトタン屋根の四角い家屋という，パリのなかで唯一の立派な町風建物であった。（パリの人々は，ほぼ円形の屋敷地に草葺き・円形の家屋を建てる）。

ウィアトゥオ集落がかんばつに見舞われたとき，人々はアニャラが雨を妨げる動機について次のように考えた。すなわち，もし人々が不作に苦しめば，人々はアニャラの店で家畜とモロコシを交換し飢えをしのぐ。アニャラはその家畜を町で売りさばき，さらにモロコシを購入して利益をかせぐだろう。つまり，かんばつの結果，人々は家畜を失い貧しくなるが，アニャラ一人が豊かになる。人々はこのように考えていた。

次に，コル集落の首長マティアの場合は，数年前からコルのモジョミジとの間に葛藤があった。第二章で述べたように，マティアの首長としての特権は削減され，ウィアトゥオ集落の雨の首長と対抗して保ってきた独自の地位が，モジョミジの対応によって損なわれつつあった。モジョミジのこうした動きを，マティアは心よく思っていなかった。

また，マティアは数年前から，R.D.C. の近くにある「協同農場」に自分の畑を営んでいた。この農場は，農業開発のために，N.C.A. と地方政府が援助して開設されたもので，百名近い農夫が参加している。マティアは，かつて，コルのモジョミジに協同農場に畑を移すよう助言したが拒否されている。

1984年，協同農場にあるマティアの畑では，モロコシが豊かに実っていたが，コルの畑は凶作だった。この事実は，モジョミジがマティアに対して抱いていた嫌疑をいっそう確かなものにした。

マティアの追放後，協同農場にあった彼の畑は，コル集落のモジョミジによって分割・分配された。また，アニャラも協同農場に畑があったが，これも同様にウィアトゥオ集落に分配された。それから，アニャラの立派な住居兼商店は，略奪・破壊された。

以上の例から明らかなように，生者の告発の背景には，経済的不均衡および嫉妬，羨望，憎悪といった感情が存在しており，告発によってそれらがいっきに表面化するのである[30]。

ところで，モジョミジ階梯による，雨の不順をもたらした容疑者の告発には，ある一定の論理が働いているように思える。

かんばつ，あるいは大雨が続くと，人々はたちまち餓えの危険に直面する。社会的緊張は高まり，モジョミジは何が（誰が）雨の不順の原因かについて思いをめぐらす。様々な可能性が検討された結果，具体的な告発に至るのであるが，告発のメカニズムには次の四つの特徴があると考えられる。

(1) 一連の告発は，様々な可能性をひとつずつ消去していく効果がある。

(2) 一般に，死者の告発が生者の告発に先行する。

(3) 告発は雨の秩序が回復するまで続けられる。

(4) 究極的には，雨の不順の原因はジュオクに帰せられる。

第二章で述べたように，降雨の因果論が多元的であるが故に，告発の回路は多様であり，雨の不順が続く限り，一連の告発は終わることはない。しかし，様々な告発は全くアトーランダムに行なわれるのではなく，そのシークエンスには上記のような秩序が認められる。そして，シークエンスのいずれの段階においても，雨が順調に降り始めると告発は終了し，もっとも最後に告発された者が，やはり雨の不順の原因であったと人々は納得するのである。また，一連の告発の果てに，雨の首長を殺害した後でもまだ雨の不順が続くような場合には，おそらくジュオクが説明因として持ち出されることと思われる。その意味において，ジュオクは降雨の因果論における究極因であるといえる[31]。

---

30) 雨の不順をもたらした責任者に対する告発は，邪術者 (sorcerer) に対する告発と類似している。たとえば，邪術者はある種の薬，あるいは毒を用いて相手に災厄を及ぼすが，これは雨薬の用法を想起させる。ケニヤ・ルオの社会では，*jandagla* と呼ばれる邪術者は，動物の死体に特別の薬と呪文を加えて，相手が通る道などに埋めるという [阿部　1983: 626–627]。この話は，1982年にブラ集落のモジョミジが，他集落への雨を妨げるために，仔犬の死体を畑に埋めた事件と共通した特性を示している。しかし，邪術はあくまで個人間の葛藤にかかわるものであって，共同体が個人を告発する，雨をめぐる紛争とは性格を異にする。また，一般に集団を分裂させる契機とみなされている邪術とは反対に，雨をめぐる紛争における個人の告発は，社会的危機にさいして，共同体の結束を固める効果を持つ点も注意しておく必要がある。

31) ヌエルの場合は，この究極因（神，クオス）以外に降雨の原因となるものはほとんどない。つまり，「彼らは，誰かが雨を『作る』ことができるとはけっして思っていない」のであり，誰であろうと「できるのは，神に対して雨を降らせてくれるように祈ることだけ」である [エヴァンズ＝プリチャード　1982: 468]。したがってヌエルは降雨の因果論そのものに関心がなく，雨の問題が政治的に深刻な紛争に発展する余地はないと言える。このヌエルとパリの相違は，ナイロート諸民族の比較研究上，興味深い。

4.　平等主義的分節社会における王権

パリ社会は本質的に，平等主義的 (egalitarian) な分節社会 (segmentary society) である。分節社会としてのパリの特質は，拙稿で論じたことがある [栗本　n.d.]。既述のように，パリ社会では雨の首長が社会経済的に突出した唯一の人物であって，社会階層の分化と呼ぶべきものは存在しない。ところで，分節の最大単位は集落であるが，雨をめぐる紛争は，集落間の対立という形態をとることがある。各集落は，自分の畑に十分な雨を降らせるために，時には他集落を不作に陥れるために様々な策略をこらす。この点では，各集落は他と切り離されて自律的である。しかし，その一方で，集落間の紛争が発展しかけると，パリ全体の統合がしばしが強調される。この統合は，「口をひとつにする」という比喩で表現されることは先に述べた。このように，パリ社会は分裂と融合という両傾向の間を振り子のようにゆれ動いているといえる。それでは，こうした平等主義的分節社会において，雨の首長はいったいいかなる意味を担っているのだろうか。そして雨の首長ニブルは，なぜ殺されなければならなかったのだろうか。

今までの歴代雨の首長のなかで，殺害されたのはニブルだけである。雨の首長に限らず，各集落の首長をとっても，少なくとも伝承をみる限りでは殺害された例はみあたらない。こうした点からすれば，ニブルが殺された背景には「暫定的女性首長」としての特殊性が働いていたと考えられる。

しかし，殺害までには至らなかったにせよ，雨の不順が原因となって，雨の首長に暴力が加えられたり，殺されかけたりしたことはかつてもあった。また，パリの周辺地域で雨の首長が存在する社会（ロトゥホ，バリ，アチョリ）をみてみると，雨の首長が暴行を受けたり，追放されたりした例には事欠かない。たとえば，1981年には，ロトゥホのサブ・グループであるロコイヤ (Lokoiya) の一村落，ロウェ (Lowe) で，雨の首長がかんばつの責任を問われて生き埋めにされている。以上のことを考慮に入れると，ニブルの殺害は決して特殊な事件ではないといえる[32]。

おそらく，人々によって権威と力量が認められている雨の首長の場合は，かんばつに見舞われても，批判が彼に集中しないのであろう。あるいは，首長自身が，雨の不順の責任を他に転稼する政治力を身につけていると言ってもよいかもしれない。ニブルの場合は，かんばつの責任を彼女が一身に引き受けてしまったのである。

いずれにせよ，平等主義的分節社会における王権（広く首長権も含めた意味で）は，

32) 1986年にはロトゥホのサブ・グループであるロフィット (Lofit) で2名の雨の首長が殺害されている。

構造的に不安定であるといえる。そして，ニブルの死後現在に至るまで，約2年間首長の空位期間が続いても，人々の日常生活にはさほど支障がないことから明らかなように，パリ社会の存続にとって，首長は不可欠の要素ではない。こうした，アフリカの王権の構造的不安定性は，すでに多くの研究者の指摘するところである。たとえば，A. Richards は次のように述べている。「常備軍と制度化された支配手段を欠く支配者はすべて，人々の信仰というナイフのエッジの上でバランスをとらねばならない」[RICHARDS 1961: 24]。まさに，雨の首長は，ナイフ・エッジの上で常にバランスを保とうと努力しているのである。

ニブルの死後，雨が順調に降り始め，その年は豊作であったため，彼女の死はパリ全体に蓄積していた社会的緊張を見事に解消することになった。いわば，彼女一人が死ぬことによって，共同体は危機から救われたのである。今に至るまで，私はニブルの殺害を後悔したり，恥じたりする声を耳にしたことがない。こう考えてくると，彼女が「贖罪の山羊」的意味あいを担って殺され，そして遺体がブッシュ，つまり共同体の外に棄てられたことは否定できない。

雨の首長だけでなく，雨の不順の責任者として告発をうけ，暴力を加えられたり，村から追放されたり．あるいは墓から遺体を掘り出されたりする人は，いずれも社会の緊張を解消するための手段という点で，贖罪の山羊的性格を持っている。そのなかでも，雨の首長は最も効果の強いヴィクティム（いけにえ）であるといえる。

こうした解釈は，R. Girard の説く犠牲（供犠）の根本原理を想起させる。Girard が，供犠の効果は，「いけにえを使うことによって共同体内の内的緊張，怨恨，敵対関係といった一切の，相互間の攻撃的傾向を吸収する」[ジラール 1982: 12] ことにあり，王殺しは，共同体の危機を救う「創始的な満場一致の暴力」[ジラール 1982: 155–176] であると述べるとき，彼は確かにニブル殺害，あるいは広く雨をめぐる紛争の本質のいったんを照らし出している。しかし，私は Girard の理論，とくに王殺しのような創始的集団暴力が神話と儀礼の起源をなすという立場，をパリの事例にあてはめることは保留したい。

いわゆる神聖王権については，Girard も含めて，フレーザー以降ぼう大な研究の蓄積がある。こうした研究史，研究動向については，最近，G. Feeley-Harnik [1985] が要領よくまとめている。これらの研究にとって，アフリカの伝統的王権，とくにシルックにおける王殺しが想像力の絶えざる源泉となってきたことは確かである。

シルックに関しては，多くの人類学的，歴史学的研究があるが，脚注7)で述べたように，実際に王殺しが行なわれていたかどうか，その肝腎の点が不明のままである。

W. Arens の指摘のとおり，シルック研究は矛盾に満ちている [Arens 1979: 167–168, 1984: 356]。Arens は，1978年にシルックの調査を行なった。現在のところ，彼の研究はシルックに関する最新のものである。しかし，調査期間(約3カ月)は限られており，彼の論文も，フィールド調査よりむしろ文献調査の資料に拠っている。

つまり，シルックは，王殺しの古典的パラダイムを提供しているにもかかわらず，信頼できる民族誌的資料は極めて少ないのである。ディンカにおける「漁槍の主の生き埋め」についても，Lienhardt [1961: chap. 8] の記述は間接的な伝聞に基づいている。ディンカ出身の人類学者，F. Deng は自身の曽祖父，祖父の生き埋めに関して記述している [Deng 1972: 132, 146] から，漁槍の主が実際に生き埋めにされたことは確かなようである。しかし，いずれにせよ，情報は伝聞に基づいている。以上のように，神聖王権の例として広く引用されてきたシルックとディンカの事例の，民族誌学的信頼度は決して高いとはいえない。

その点，パリにおける首長殺しの事例は，私の調査期間中に発生した現在進行形の出来事であり，それを詳細に記述できたことは，研究者として幸運だったと考えている。言うまでもなく，同じ西ナイロートとして，パリはディンカやシルックと共通の歴史・文化的伝統を有しており，本論文は，ナイロートにおける比較研究の一助となるものと考える。

最後に，ニブルの殺害は，フレーザー的意味での王殺しとは異なることを指摘しておく。M. W. Young は，Evans-Pritchard の議論を受けて，「制度化された儀礼的王殺し」と「社会的制裁である暗殺」という二つの王殺しを区別している [Young 1966: 138]。ニブルの殺害は，それに至る十分な理由はあったにせよ，事のなりゆき上の突発的な事件であったから，後者のタイプにあてはまると考えられる。もちろん，フレーザー的王殺しは前者である。先に少し述べたロコイヤで最近生じた雨の首長の生に埋めは前者のタイプであると言える。Young の二類型は，スーダン南部における今後の調査によって，発展の余地があるものと思われる。

5.　結びにかえて

雨をめぐる紛争に対するパリの態度には，熱さと冷たさが奇妙に同居している。熱狂的に被告発者を糾弾していた男が，ある時には，「人間に雨を降らせる力があるはずがない。もし，ほんとうにその力があるなら，乾季にも雨を降らせて，一年中畑を耕せばよいのだ」等と醒めたことを言う。いわば，こうした合理主義と神秘主義の狭間から紛争が産み出されているのかもしれない。

本論において私が試みたのは，複雑にこみいった紛争のよりよいテクストを記述し，そのテクストによりよい注釈を加えることであった。私はいわば，語り部 (story-teller) 兼解釈者 (interpreter) を目指したといえる。この試みは成功したとはいい難いが，その不足分，とくに首長の本質の考察と様々な象徴の解読の問題は，今後の調査研究で補うこととしたい。

現在の食料生産システム，気象条件，および降雨の因果論が変化しない限り，雨をめぐる紛争はこれからも絶えないことと考えられるのである。

付　　記

本論文は以下の4回にわたる現地調査の成果の一部である。1978年度：京都大学野外科学研究会ナイル踏査隊（毎日新聞社後援），1982年度：文部省科学研究費補助金（海外調査）の交付を受けた「ザイール東部とスーダン南部における農業と土地利用の研究」（研究代表者，坂本慶一京都大学農学部教授），1984年度：文部省科学研究費補助金（海外調査）「アフリカ・上ナイル及び大湖地方における農業生産の比較研究」（研究代表者，坂本慶一京都大学農学部教授），1985年度：講談社・野間アジア・アフリカ奨学金。現地調査は，これらのプロジェクトの一環として行なわれた。スーダンでは，ジュバ大学社会経済学部に，客員研究員として所属し，調査研究上の様々な便宜をはかっていただいた。

ジュバ大学講師（社会人類学）Simon Simonse 氏には，調査期間中に有益な示唆をいただいた。また，谷泰京都大学教授，阿部年晴埼玉大学教授，福井勝義国立民族学博物館助教授には，草稿の段階で貴重なコメント・批判をいただいた。記して謝意を表したい。

文　　献

阿部年晴
1979 「ケニヤ・ルオ社会における jachien について」『アフリカ研究』18: 58–70。
1983 「ルオ社会の災因論においては死者と妖術—邪術—」『一橋論叢』90(5): 616–631。

Arens, W.
1979 The Divine Kingship of the Shilluk: A Contemporary Reevaluation. *Ethnos* 44: 167–181.
1984 The Demise of Kings and the Meaning of Kingship: Royal Funerary Ceremony in the Contemporary Southern Sudan and Renaissance France. *Anthropos* 79: 355–367.

p'Bitek, O.
1963 Concept of Jok among the Acholi and Lango. *Uganda Journal* 27: 15–29.
1971 *Religion of the Central Luo.* Kenya Literature Bureau.

Deng, F.
1972 *The Dinka of the Sudan.* New York: Holt, Rinehart & Winston.

エヴァンズ＝プリチャード，E. E.
1982 『ヌアー族の宗教』向井元子訳，岩波書店。

Evans-Pritchard, E. E.
1940 *The Political System of the Anuak of the Anglo-Egyptian Sudan.* The London School of Economics and Political Science. (Reprinted by AMS Press in 1977.)

1948 *The Divine Kingship of the Shilluk.* Cambridge U.P.
1950 Ghostly Vengeance among the Luo of Kenya. *Man* 50: 86–87.
1953 A Note on Ghostly Vengeance among the Anuak of the Anglo-Egyptian Sudan. *Man* 53: 6–7.

FEELEY-HARNIK, G.
1985 Issues in Divine Kingship. *Annual Review of Anthropology* 14: 273–313.

JAMES, W.
1972 The Politics of Rain Control among the Uduk. In I. Cunnison and W. James (eds.), *Essays in Sudan Ethnography*, C. Hurst and Company, pp. 31–57.

ジラール, R.
1982 『暴力と聖なるもの』古田幸男訳, 法政大学出版局。

加藤　泰
1984 「メル族の雨乞い儀礼」『季刊民族学』30: 66–74。

栗本英世
n.d. 「分節化と集成化—分節社会の2類型—」福井勝義編『集団の編成と統合』河出書房新社 (in press)。

KURIMOTO, E.
1984 Agriculture in the Multiple Subsistence Economy of the Pari. In K. Sakamoto (ed.), *Agriculture and Land Utilization in the Eastern Zaire and the Southern Sudan.* Research Project Team for the Studies on Agriculture and Land Utilization in the Eastern Zaire and the Southern Sudan, Department of Agricultural and Forestry Economics, Faculty of Agriculture, Kyoto University, pp. 23–51.
1986 Traditional Fishery among the Nilotic Pari of the Southern Sudan. In K. Sakamoto (ed.), *Comparative Study of the Agricultural Production in the Upper Nile Area and the Great Lakes Area.* Department of Agricultural and Forestry Economics, Faculty of Agriculture, Kyoto University.

LIENHARDT, G.
1954 The Shilluk of the Upper Nile. In D. Forde (ed.), *African Worlds*, Oxford U.P., pp. 138–163.
1961 Divinity and Experience: the Religion of the Dinka. Oxford: Clarendon Press.
1962 The Situation of Death: an Aspect of Anuak Philosophy. *Anthropological Quarterly* 35: 74–85.

ムビティ, J. S.
1970 『アフリカの宗教と哲学』大森元吉訳, 法政大学出版会。

長島信弘
1982 「解説」『ヌアー族の宗教』エヴァンズ＝プリチャード著, 向井元子訳, 岩波書店, pp. 533–542。
1983 「序」(一橋大学アフリカ学術調査団報告『ケニアの六社会における死霊と邪術—災因論研究の視点から』)『一橋論叢』90 (5): 593–598。

OGOT, B. A.
1961 Concept of Jok. *African Studies of the University of the Witwatersland* 20: 123–130.

RICHARDS, A.
1961 African Kings and Their Royal Relatives. *Journal of Royal Anthropological Institute* 91: 135–150.

SELIGMAN, C. G. and B. Z. SELIGMAN
1932 *Pagan Tribes of the Nilotic Sudan.* Routledge & Kegan Paul Ltd.

YOUNG, M. W.
1966 The Divine Kingship of the Jukun: Re-evaluation of Some Theories. *Africa* 36: 135–152.

付録Ⅰ　人　名　録

ピデレ　Pidele（男）：ウィアトゥオ集落の雨の首長。1980年に病死。ピデレはクリスチャン名。

ニブル　Nyiburu（女）：ピデレの第一夫人。夫の死後，雨の首長位を継ぐが，1984年7月に殺害される。

アニャラ　Anyala（男）：雨の首長のリニィジに属する長老。雨薬を持つとみなされている。1982年，83年の二度にわたり村から逃亡する。

マティア　Mattia（男）：コル集落の首長。1984年9月，村から追放される。クリスチャン名。

ルドルフォ　Rudolfo（男）：アチョリ族の雨の首長。1982年8月に来村。クリスチャン名。

ウイエン　Wiyen（男）：コル集落のアジュワ（占師）。1984年8月，村から追放される。

アクドゥ　Akudu（女）：ブラ集落のアジュワ。1982年5月，ブラとウィアトゥオ集落間の紛争に巻き込まれ殺される。

リコリ　Likori（男）：ロトゥホ族の雨の首長。1985年6月，コル集落に来村。

イコイ　Ikoi（女）：ロトゥホ族のアジュワ。1985年6月，プゲリ集落に来村。

付録Ⅱ　紛争の年表

年	月	で　き　ご　と	モロコシ・雨の状況
1980	5	雨の首長ピデレの病死	
1982	3	ブラ集落のモジョミジ，アジュワ（Akudu）に会う	
	4		播種
			ブラとプチュワを除き雨不足
	5	ニブルとアニャラが換問される	ウィアトゥオかんばつ
		ニブルとアニャラ，撲たれる	
		ブラのモジョミジ二名，アジュワ一名が殺される	
	6	アニャラ逃亡	
		ニブル換問され，その後逃亡	
	8	アチョリの雨の首長，ルドルフォ来村	大雨が降りはじめる
			播種
	9	ルドルフォ追放される	雨が降り続く
			大不作
1983	4		播種，雨不足
	5	ニブルとアニャラ帰村	
	6	ピデレの墓があばかれる	雨不足，飢餓深刻化
			雨が降る，播種
	7	ニブルとアニャラが換問される，アニャラ逃亡	雨が止まる
			雨が再び降りはじめる
	9		豊作
1984	4		播種
	5	ウィアトゥオで墓があばかれる	雨が止まる，再び播種
	6	ニブルの換問	かんばつ
		ニブル二度目の換問	

	7	ニブル三度目の換問，ニブル殺害される	雨が降りはじめる
		コルのモジョミジ，首長マティアに要求提出	しかし，コルとアングルメレはいぜんかんばつ
	8	アジュワ・ウイエン，追放される	
	9	コルで，アベニの墓があばかれる コルの首長マティア，追放される	コル，アングルメレ，プゲリの一部は不作，他は豊作
1985	3		播種
	4		雨は順調
	5	モジョミジの会議，コルとブラが非難される	雨が止まる
	6	ロトゥホの雨の首長，リコリ来村，ロトゥホのアジュワ，イコイ来村 ウィアトゥオ，代表をジュバのアジュワへ派遣	雨が降りはじめる
	8		いなご，Weavers の来襲
	9	コルとウィアトゥオの年齢組間で stick fight，ウィアトゥオの若者死亡 →コル集落のドラム・ハウスがウィアトゥオによって焼き払われる	ウィアトゥオを除き大不作